平成 28 年度

講 義 要 項

子ども教育学研究科子ども教育学専攻

修 士 課 程

埼 玉 学 園 大 学

目　次

教育人間学特論（松永幸子）----------1
子ども発達特論（金谷有子）----------2
学習心理学特論（中本敬子）----------3
発達障害支援特論（増南太志）----------4
子どもと家庭支援特論（杉浦浩美）----------5
学校マネージメント特論（葉養正明）----------6
多文化子ども教育特論（堀田正央）----------7
教育方法学特論（渡邊光雄）----------8
教育実践研究特論（梅澤　実）----------9
カリキュラム開発特論（久保田善彦）----------10
教育メディア特論（森田裕介）----------11
子どもの言葉特論（細川太輔）----------12
子どもの数・図形概念特論（斎藤　昇）----------13
子どもの科学認識特論（長友大幸）----------14
子どもの造形表現特論（森本昭宏）----------15
子どもと道徳特論（吉村日出東）----------16
小学校授業実践演習（梅澤　実・細川太輔）----------17
幼稚園教育実践演習（金谷有子・小川房子）----------18
教材・環境開発演習（長友大幸・森本昭宏）----------19
いじめ・自殺・不登校問題演習（松永幸子・増南太志）----------20
地域連携プロジェクト演習（堀田正央・杉浦浩美）----------21

教育課題研究Ⅰ
梅澤　実----------22
渡邊光雄----------23
金谷裕子----------24
吉村日出東----------25
松永幸子----------26
長友大幸----------27
堀田正央----------28
増南太志----------29

教育課題研究Ⅱ
梅澤　実----------30
渡邊光雄----------31
金谷有子----------32
吉村日出東----------33
松永幸子----------34
長友大幸----------35
堀田正央----------36
増南太志----------37

教育課題研究Ⅲ
梅澤　実----------38
渡邊光雄----------39
金谷有子----------40
吉村日出東----------41
松永幸子----------42
長友大幸----------43
堀田正央----------44
増南太志----------45

教育人間学特論　　松永幸子

授業概要

教育の基底にある人間や生命についての考え方を、哲学的、歴史学的視座を持ち探求する。とくに、近代イギリスの代表的思想家たちであるホッブズ、ジョン・ロックやヒュームらの思想から、教育と情念との関係などを分析する。当時の教育観についての専門知識を得ることにより、翻って現代の教育・生命問題にどう生かすことが出来るのかの考察も含めて講義する。

授業計画

到達目標

1．教育の基底にある人間観や生命観について専門知識を深める。
2．教育、人間について、人間学的、歴史学的で相対的考察が出来る。
3．教育人間学の専門的知識を習得した上で、人間、社会、子どもにとっての望ましい文化、幸福について新たな知見を獲得し、教育実践に適応できる。

第 1 回	オリエンテーション　ミドルリーダーの力量として、教育人間学の専門的知識を習得し、教育の基底にある人間観や生命観について思索すること。
第 2 回	トマス・ホッブズと生命・人権－子どもの最大利益を考えるとはどういうことか？
第 3 回	トマス・ホッブズと子どもの権利
第 4 回	ジョン・ロックにおける教育・人間・自己
第 5 回	ジョン・ロックにおけるプロパティ
第 6 回	ジョン・ロックと子どもの権利
第 7 回	ロック・ヒュームにおける自己・生命
第 8 回	ロック・ヒュームにおける情念とモラル
第 9 回	ヒュームの道徳論①人為的徳の形成と教育
第 10 回	ヒュームの道徳論②女子教育について
第 11 回	イギリス自殺論争と生命、人間、教育
第 12 回	子どもの生命観を育てる教育事例の考察
第 13 回	イギリスの人道協会と教育思想
第 14 回	古代養生論と教育①現代精神医学との比較―子どもが命の大切さを学ぶということ－
第 15 回	古代養生論と教育②現代食育との関連
第 16 回	筆記試験

修上の注意

各回、教育実践と本授業内容を関連づけ、各自、その考察をノートにまとめ、次時にその考察を更に探求する。

評価方法

教育人間学の専門的知識の習得、及び教育の基底にある人間観や生命観についてのレポート（60%）、授業における課題の捉え、発表（40%）で評価する。

テキスト

使用しない。
参考文献を授業時に指示する。

子ども発達特論　　金谷有子

授業概要

はじめに発達心理学の主要理論について講義する。さらに発達心理学や臨床発達心理学の実証研究による最新の知見を基に、子どもの発達に影響を与える様々な要因について講義する。受講生各自が子どもの発達にまつわる具体的問題を探るための基礎的知識と応用へのヒントとなる発達の重要概念についても講義する。

授業計画

到達目標

１．主要な発達理論と重要概念を理解すること
２．子どもの発達のプロセスとそれに影響する要因を理解すること
３．子どもの発達に関わる具体的問題を探る視点を獲得し、教育実践を分析すること
４．子どもの発達に関わる具体的問題に対処する方法を考え教育実践に生かすこと

第 1 回	オリエンテーション　本授業とミドルリーダーとしての力量について、到達目標との関わりで講義する
第 2 回	認知領域の発達心理学の理論
第 3 回	言語領域の発達心理学の理論
第 4 回	社会・情動領域の発達心理学の理論
第 5 回	自己と他者との関係性領域の発達心理学の理論
第 6 回	発達のプロセスと発達の促進・保護要因
第 7 回	発達のプロセスと発達の阻害要因
第 8 回	発達研究からの知見：表象の発達を促す教育
第 9 回	発達研究からの知見：遊びと創造性を促す教育
第 10 回	発達研究からの知見：メタ認知を促す教育
第 11 回	発達研究からの知見：物語る力を育てる
第 12 回	発達研究からの知見：教育と発達と関係をまとめる
第 13 回	臨床発達心理学からの知見：発達における脆弱性
第 14 回	臨床発達心理学からの知見：発達におけるレジリエンス
第 15 回	臨床発達心理学からの知見：発達の問題と発達支援
第 16 回	筆記試験

履修上の注意

配布資料や参考文献を予習・復習すること。
各回、教育実践と本授業内容を関連づけ、各自、その考察をノートにまとめ、次時にその考察を更に探求するといった、知見を基に身近な問題を考察する習慣をつけること。

評価方法

主要な発達理論と重要概念の習得、及び、子どもの発達に関わる具体的問題を探る視点と具体的問題に対処する方法について小テスト（20%）、小レポート（20%）と筆記試験（60%）で評価する。

テキスト

毎回プリント資料を配布する。
参考文献も毎回紹介する。

学習心理学特論　　中本敬子

授業概要

幼稚園及び小学校のミドルリーダーには、幼児児童の学習を支援するため，体系的な教育実践を構想する力が必要である。そこで，本科目では，幼児期から児童期にかけての発達や学習の基本現象や理論を習得した上で，これらに基づいて教育実践の事例を分析的に捉え，より効果的な指導や学習環境について具体的に考察していく。授業では，基本現象や理論の習得については講義と文献読解を，事例分析等については受講生による発表と討論を中心として進める。

授業計画

到達目標

１．知識やスキルの習得のメカニズムを心理学的観点から理解する。
２．乳幼児期から児童期にかけての知的発達と学習との関連を基礎理論を踏まえて理解する。
３．授業等における幼児・児童の学習を分析的に検討する力を身につける。
４．幼児・児童の学習を支援するための授業や学習環境をデザインするための手がかりを得る。

第 1 回	イントロダクション（本授業とミドルリーダーとしての力量と授業のねらい、授業の進め方。受講生の学習観の確認）
第 2 回	学習の基礎理論（行動主義，認知主義，状況主義）
第 3 回	情報処理モデル（記憶のマルチストアモデル，ワーキングメモリ）
第 4 回	知識の表象（概念とカテゴリー，スキーマ，スクリプト）
第 5 回	知識の構成過程としての学習（認知的構成主義，社会的構成主義）
第 6 回	発達の観点から見た学習（思考の発達に関する基礎理論）
第 7 回	言語，数学的概念，科学概念の発達（語彙と文法規則の発達，数唱方略と数概念の発達，科学概念の変容）
第 8 回	メタ認知（学習におけるメタ認知の役割，メタ認知の発達）
第 9 回	学習を支援するための学習環境のデザイン（問題解決型学習，協働学習，形成的フィードバック）
第 10 回	幼児期における他者とのやりとりに基づく学習に関する事例分析
第 11 回	幼児期における体験に基づく学習に関する事例分析
第 12 回	児童期における数的概念の学習に関する事例分析
第 13 回	児童期における科学概念の学習に関する事例分析
第 14 回	児童期における言語力の育成に関する事例分析
第 15 回	展望（今後の学習支援のあり方についての検討）

履修上の注意

履修にあたっては，これまでに受講した教育心理学や学習心理学関連の授業内容を確認しておくことが望ましい。また，各回の授業で予習や発表準備等の事前学習，授業内容に基づくミニ・レポート等を課すので積極的に取り組んでもらいたい。

評価方法

情報処理モデルや知識表象，学習と発達に関する理論等の基本的知識については，小テストやミニ・レポートによって評価する（30%）。また，学習指導・支援の分析については，授業時の発表や討論，ミニ・レポートにより評価する（30%）。学習支援のための指導や学習環境デザインについては，期末レポートによって評価する(40%)。

テキスト

テキストは使用せず，資料を配付する。また参考になる図書については授業中に適宜紹介する。

発達障害支援特論　　増南太志

授業概要

発達障害児の行動特性を理解するための理論や、原因となる問題を特定するためのアセスメントについて代表的なものを中心に講義する。また、アセスメント結果を用いて、発達障害児に対応する方法を示しながら、理論と実践を結びつけた支援のあり方について講義する。

授業計画

到達目標

１．現在の教育における子どもの発達障害の現状について理解する。
２．発達障害児の行動特性を学び、その行動を理論的に捉える視点を獲得する。
３．発達障害の原因となる問題をとらえるためのアセスメントについて理解し、対応方法を探る視点を獲得する。

第 1 回	オリエンテーション　本講義の目的と進め方、本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標との関わりを講義する。
第 2 回	発達障害の現状と各種障害の定義
第 3 回	発達障害の理論とアセスメントの意義
第 4 回	学習障害の種類と認知特性に関する理論
第 5 回	学習障害の認知的な偏りをとらえるためのアセスメント
第 6 回	学習障害児の事例と指導プログラム
第 7 回	注意欠陥多動性障害児の行動特性を説明する理論
第 8 回	注意欠陥多動性障害の行動特性をとらえる質問紙と原因特定のための検査
第 9 回	注意欠陥多動性障害の理論に基づく対応の事例
第 10 回	自閉症児の特徴とその症状を説明する理論
第 11 回	自閉症の症状理解のためのアセスメント
第 12 回	自閉症児の事例と指導プログラム
第 13 回	学習障害児の理論とアセスメントに関する研究論文講読
第 14 回	注意欠陥多動性障害児の理論とアセスメントに関する研究論文講読
第 15 回	自閉症児の理論とアセスメントに関する研究論文講読

履修上の注意

資料等は事前に読んで、専門用語は調べておくこと。各回、発達障害の現状と本授業内容を関連づけ、各自、その考察をノートにまとめ、次時にその考察を更に探求するといった、知見を基に身近な問題を考察する習慣をつけること。

評価方法

発達障害に関わる諸問題について、理論を踏まえた解決の在り方を、各自が協働してディスカッションできたか、また、レポートを基に、各自の問題意識が深化されたかを評価する。ディスカッション（40%）、レポート（60%）

テキスト

授業時に指示する。

子どもと家庭支援特論　　杉浦浩美

授業概要

「家庭支援」には、多様な観点からのアプローチが求められているが、本講義では「母親支援」に焦点をあてる。子どもの成長を担う専門職にとって、母親への理解や支援は欠かせない。そこで、講義ではまず、現代の母親たちがおかれている状況を深く理解することから始め、そのうえで、母親たちをエンパワーするための支援のあり方を講義する。

現代の母親たちが直面している「子育ての困難」は、単に、子どもとの関係性だけで読み解けるものではない。そこには、就労との両立、夫婦間の葛藤、女性に向けられる社会的プレッシャーなど、複雑な問題がからみあっている。子育て負担感の背景や、母親の悩みを理解するためには、女性をとりまく社会状況や経済環境、さらには社会規範や意識のありようなど、幅広い視点や知識が必要となる。本講義ではそうした視点や知識を得て、各自が問題を構造的に読み解く力を養い、支援のあり方を考え実践していく力を養うことを目的とする。

授業計画

到達目標

１．家庭支援における母親支援のあり方について理論的にアプローチする
２．現代の母親が抱えている問題や困難について理解を深める
３．問題を構造的に読み解く力を身につけ、支援のあり方を多角的に検討する
４．支援者としての実践力を身につける

第 1 回	家庭支援とは何か～本授業とミドルリーダーとしての力量について、理論と実践の側面から考える
第 2 回	家庭支援における「母親支援」という観点～専門職に求められること
第 3 回	子育てをめぐる困難　1　子育てをめぐる社会状況
第 4 回	子育てをめぐる困難　2　母親に向けられる社会意識
第 5 回	母親が抱えている困難　1　就労・職場との関係
第 6 回	母親が抱えている困難　2　夫婦間の葛藤
第 7 回	母親が抱えてい諸困難　3　家庭と経済環境
第 8 回	支援へのアプローチ　1　「不安」や「ストレス」をうけとめる
第 9 回	支援へのアプローチ　2　制度利用と情報提供
第 10 回	支援へのアプローチ　3　支援ネットワークの構築
第 11 回	支援へのアプローチ　4　専門職同士の連携
第 12 回	支援者として　1　「ケア」と「労働」の視点から
第 13 回	支援者として　2　「感情労働」の視点から
第 14 回	家族をエンパワーするために～1　個人報告とディスカッション
第 15 回	家族をエンパワーするために～2　個人報告とディスカッション

履修上の注意

文献講読や事例研究など、報告や議論に積極的に参加することを求める。そのためには、普段から、子育てをめぐる問題や家族をとりまく状況に、積極的にアンテナを張り巡らし、自らが「問い」を発し考える、という態度が求められる。

評価方法

中間と期末の 2 回、レポート提出を課す。評価は、授業での報告や議論への参加態度（20%）と中間レポート（30%）、期末レポート（50%）で評価する。

テキスト

適宜、テーマごとに、講読する文献を指示する。また必要に応じて資料を配布する。

学校マネージメント特論　　葉養正明

授業概要

将来のミドルリーダーとしての資質を培う視点に立ち、受講者には、①社会変化やそれに対応するための内外の教育改革の動きの理解、②地域の学校としての保護者ニーズや子どもの特性のとらえ方の技法の修得、③協力校をベースに、以上の 2 点を基盤とし、SPSS を用い学校改善進めるための提案書の作成を求める。以上に対応した理論や技法の獲得のため、内外の重要文献の読み込みも重視して授業を進める。

授業計画

到達目標

１．幼年期教育に関連する国や地方自治体の改革動向を理解する。
２．幼年期教育に関連する内外の文献を収集し、重要文献の読み込みを進める。
３．ニーズアセスメントの技法やアクションリサーチの理論や技術の修得を目指す。
４．協力校を選定し、同校の学校改善の試みの現段階や抱えている問題解決、という視点でのニーズアセスメントの実施、アクションリサーチによる課題解決策の提案を行う。

第 1 回	オリエンテーション　ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけ、受講者に求められる役割や文献等の解説、受講の心構えなどを説明する。
第 2 回	幼年期教育改革の内外の動向－我が国における文教政策のなかでの幼年期教育の改革動向や背景、現在の段階
第 3 回	国際機関の幼年期教育政策の提言－OECD のカントリレポート（日本編）や CERI の研究物の中での幼年期教育政策提言を見る
第 4 回	認定こども園の現段階、NZ の幼保一元化政策
第 5 回	協力校の選定、紹介、動向の教育活動の特色、課題など
第 6 回	ニーズアセスメントの技法を学ぶ
第 7 回	アクションリサーチの学習
第 8 回	SPSS を活用した学校データ分析モデルの学習の開発①
第 9 回	SPSS を活用した学校データ分析モデルの学習の開発②
第 10 回	協力校訪問と校長、副校長、主幹教諭などのヒアリング
第 11 回	学校データの収集①
第 12 回	学校データの収集②
第 13 回	学校データの収集と PC への打ち込み
第 14 回	協力校の現状や課題などを明確にする。
第 15 回	受講者それぞれの学校改善提案の発表と討議

履修上の注意

この授業は大学での座学と学校現場との往還的な取り組みとして進めます。最後には、協力校をフィールドとした学校改善案を作ります。試験やレポートは、それによって代替します。PC を利用した自宅学習なども求められます。授業時間外に、"data-driven decision making for effective school leadership"(by A.G.Picciano)など、授業で想定されている手法の活用を解説した書物や政策大学院大学の教育政策コースで蓄積されている修士論文などを講読し授業に臨むこと。また、学校をフィールドとして想定しているため、学校や教育委員会との連携を進め、当該校の学校運営改善に役立てられるような学校改善案を目指します。

評価方法

授業の到達目標は、協力校の現状や課題の分析、SPSS を導入した学校改善策の提案書の作成に置かれています。そこで、評価は、授業における課題の取り組み（30%）、提案書のレベル（70%）によることになります。

テキスト

SPSS を活用した学校改善モデルの解説書がありますので（米国のもの、翻訳書なし）、それをコピーして重要部分の学習を進めます。

多文化子ども教育特論　　堀田正央

授業概要

OECD 諸国等の保育・教育システムや方法論、日本の多文化保育・教育の現状や課題等を通じて、多様な教育観、教育環境、教育方法について考察するとともに、ドキュメンテーションやカウンセリング等の具体的な実践について学んで行く。多文化共生社会におけるより良い教育環境構築に向けて、「保育者/教師−子ども」に留まらない広い視点で教育を捉えながら、多様なニーズを踏まえたチルドレンファースト実現にむけて、科学的根拠に基づいた講義を行う。

授業計画

到達目標

１．国・文化・子ども等を各自が再定義するとともに、その多様性を理解する。
２．各国の福祉・教育政策の現状と問題点を探り、改善点を見出す。
３．日本の多文化保育・教育の現状と課題を様々なシステムレベルで捉える。
４．多文化共生社会における教育について各論的な提言ができる。

第 1 回	オリエンテーション　ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけの理解と導入討論(国・文化とは何か、子どもとは誰か)を行う。
第 2 回	国・文化・保育の定義と多様性
第 3 回	OECD 諸国における移民と教育問題
第 4 回	多文化主義を標榜とする国々における児童福祉・教育政策
第 5 回	社会民主主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第 6 回	保守主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第 7 回	家族主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第 8 回	日本における移民政策の歴史と在日外国人の人口動態
第 9 回	日本の多文化保育・教育の現状(定量的なデータから)
第 10 回	日本の多文化保育・教育の現状(定性的なデータから)
第 11 回	外国籍や外国に繋がる子どもへの保育・教育の事例分析
第 12 回	多文化保育・教育における保育者・教師の専門性と役割の考察
第 13 回	行政における多文化保育・教育への取り組み―川口市の事例も取り上げる―
第 14 回	互恵的教育環境のためのアンチバイアス教育、ESD 教育
第 15 回	総括討論(多文化共生社会におけるあるべき保育・教育の形、地域にむけた提言)

履修上の注意

授業内でのディスカッション等へは積極的に参加すること。
複数回文献レビューやレポートを課すことがある。
英語による文献・資料のために必要な者は辞書を用意すること。
本学の位置する川口市内では、平成 26 年において 22,958 人もの外国籍住民と 563 名もの外国籍児童が存在する。また平成 21 年の調査では認可保育所の 60%以上で外国につながる子どもの利用がみられている。この様な特性を踏まえ、地域における実際の教育・保育に有効な、妥当性・信頼性の担保された具体的な考察や提言を行う意識をもつこと。

評価方法

文献レビューやディスカッション、期末レポート等により、多文化共生社会における教育について提言できる力を評価する。文献レビューやディスカッション（40%）、期末レポート（60%）。

特に定めない。適宜授業内で資料を配布するとともに、参考文献・書籍等を紹介する。

教育方法学特論　　渡邊光雄

授業概要

教育方法学の歴史的系譜を理解し、教育の現代的課題を把握すると共に、学習による人間形成の教育方法的研究について、その基盤を修得する。「説明責任」や「危機管理能力」が求められる現代社会において特別支援教育を含む学校教育全体を見渡し、「誤りから学ぶ教育」(「成長支援としての教育」)の立場からの教育方法の歴史的･社会的背景と理論的･制度的基盤を考察する。

現代の学校教育における人間形成の課題を考えるとき、古代から現代に至る人間社会の歴史において、どのような精神的潮流の中で、「子ども」がどのように捉えられ、どのような方法で「教育」されてきたのかを特徴的に考える必要がある。その上で、特別支援教育を含む学校教育全体に対して現代社会がもたらす課題に応えるために、初等教育段階における従来の用語の「幼児・児童」を「子ども」という用語に置き換えて対処するときに特徴的に表われる人間形成のいとなみを考える必要がある。その人間形成のいとなみを教育方法学上の問題としてどのように捉えるべきかということを考究できるように講義する。

授業計画

到達目標

１．教育方法学の歴史的系譜とそこにおける「子ども」の捉え方の歴史的位置づけについて、「精神的自由」を求める人間社会の歴史の観点から理解する。
２．教育における現代的課題について、「無意図的誤り」の観点から把握する。
３．学習による人間形成の教育方法的研究について、「誤りから学ぶ教育」の立場から理解する。
４．教育方法的研究の基盤について、「無意図的誤り」への対処法に関する研究から理解する。

第1回	オリエンテーション　ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけと、高度情報通信環境･核エネルギー利用環境･高度医療環境における人間形成の課題を考える。
第2回	現代社会における「無意図的誤り」による潜在的脅威からの「精神的自由」を考える。
第3回	古代から現代に至る人間社会の歴史に見られる「精神的自由」の歴史を探る。
第4回	古代から中世に至る「小さな大人」への暗記中心の教育（「導きとしての教育」）の方法に見られる「精神的自由」のいとなみを探る。
第5回	近代から現代に至る「児童・生徒」への経験中心の教育（「伝達としての教育」）の方法に見られる「精神的自由」のいとなみを探る。
第6回	「児童・生徒」への経験中心の教育の方法を成り立たせる前提条件を探る。
第7回	現代から近未来に至る「子ども」への成長支援中心の教育（「誤りから学ぶ教育」）の方法に見られる「精神的自由」のいとなみを考える。
第8回	「誤りから学ぶ教育」の方法としての環境（「自由で応答的で援助的な環境」）づくりを探る。
第9回	「誤りから学ぶ教育」の方法において「認知的バイアス」がもたらす「無意図的な誤り」を探る。
第10回	「誤りから学ぶ教育」の方法における「無意図的な誤り」への対処法を探る。
第11回	「無意図的な誤り」への対処法を教えることが難しい理由を探る。
第12回	「認知的バイアス」による「無意図的誤り」は、「認知的バイアス」を自覚しただけでは避けられず、「脱バイアス・ストラテジー」を組み込んだ環境づくりを不可欠とすることを考える。
第13回	「認知的バイアス」の自覚に基づく「脱バイアス・ストラテジー」の環境をともなった教育方法の構築を考える。
第14回	「脱バイアス・ストラテジー」の策定による教育方法を、近年話題の「進化論的な心理学」との関わりで考える。
第15回	現代から近未来に至る教育方法が「誤りから学ぶ教育」の考え方の下で「進化論的な心理学」の発展に支えられるか否かということの可能性について、考察する。

履修上の注意

現在、日本を含む国際社会は、人間社会の歴史的登場以来の人間形成あるいは教育の歴史において、従来にない大きな変化を遂げようとしている。その変化がどのようなものであり、その下で、「子ども」をめぐる人間形成あるいは教育のいとなみにも大きな変化が現れてきている。そうした状況を教育方法学の立場から捉え、現代社会に生きる教育関係者として将来どのように見据えるべきかを考えることが、授業履修者に求められる。

評価方法

毎回の講義における課題に対して提出されるレポート（40%）と15回の講義の終了後に提出されるレポート（60%）で評価する。

テキスト

H.J.Perkinson.(1984). Learning from our mistakes : A reinterpretation of twentieth-century educational theory. Westport : Greenwood Press. (パーキンソン,H.J.　平野智美･五十嵐敦子･中山幸夫(訳)(2000).　誤りから学ぶ教育に向けて―20 世紀教育理論の再解釈― 東京:勁草書房)

教育実践研究特論　　梅澤　実

授業概要

小学校、幼稚園における将来のミドルリーダーとしての資質を培う視点から、小学校国語科の授業を中心に授業を実証的に研究する方法、教師の意思決定・教師の語り（ナラティブ）の構造的特性、教師の成長を促す組織的要因について講義する。具体的には、(1)教授学習過程を教師と学習者の相互作用として捉え、教材内容と学習課題、学習活動の設定、教師の発問系列・構成と教授方略などを視点にその構造を分析する方法の理解、(2)教師の実践過程における認識・思考、意思決定、省察、改善等に見られる教師の専門的知識基盤のあり方の理解、(3)ミドルリーダーとして教育実践研究を行う姿勢の修得を目指す。受講生は、前時に配布された授業実践記録を読み込み、分析レポートを作成し、次時授業においてそれをもとに講義する。

授業計画

到達目標

１．教授学習過程の構造を分析する方法を理解する
２．教師の実践過程における専門的知識基盤のあり方を理解する。
３．自己の教育実践を対象化して，記述できる力量を形成する。
４．教育実践に対する自己の姿勢について提言する。

第 1 回	オリエンテーション　本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標から理解し、学習の進め方、及び受講者に求められる心構えについて
第 2 回	教育実践研究の目的と意義－教育実践研究とは何か。教育の方法と技術の捉え方
第 3 回	教授学習過程における相互作用の分析（1）－授業記録の意味
第 4 回	教授学習過程における相互作用の分析（2）－授業記録の量的分析
第 5 回	教授学習過程における相互作用の分析（3）－授業記録の質的分析
第 6 回	教授学習過程における相互作用の分析（4）－情報処理アプローチの視点から，学習者の文章読解過程，問題解決過程の考察
第 7 回	教授学習過程における相互作用の分析（5）－社会文化的アプローチの視点から、学習活動における学習者の学びの考察
第 8 回	教授学習過程における相互作用の分析（6）－メタ認知の活性化を促す学習活動の考察
第 9 回	教師の成長と授業（1）－教師の専門的知識の考察
第 10 回	教師の成長と授業（2）－初任教員と熟達教員の意思決定過程の比較
第 11 回	教師の成長と授業（3）－初任教員と熟達教員の単元設計過程の比較
第 12 回	教師の成長と授業（4）－子どもが「見える」ことと教師の「言葉がけ」の考察
第 13 回	教師の成長と授業（5）－実践者のナラティブの意味
第 14 回	教師の成長と授業（6）－教師の成長を促す組織的要因。教育実践研究における倫理の問題
第 15 回	まとめ－教育実践研究を行う姿勢をまとめ発表する。

履修上の注意

事前に配布された教育実践記録を読み込み、その分析結果をまとめて授業に臨む。作成した分析結果を授業の中でプレゼンテーションできるように用意する。受講生は、文献講読、データー処理や分析方法等の質問や疑問について，オフィスアワー及びをメール等で適宜質問して指導を受け、理解の深化を図る。また、各回、教育実践と本授業内容を関連づけ、各自、その考察をノートにまとめ、次時にその考察を探求させるといった、知見を基に教育授業を省察する習慣をつけること。

評価方法

積極的な受講姿勢と実践記録の分析レポート（50%）、また、最終回で、それまでの学びをもとに、これからの教育実践改善への取り組み方についての発表（50%）により評価する。

テキスト

小学校学習指導要領・幼稚園教育要領。他の必要な文献は、講義の中で適宜指示する。

参考文献：・高久清吉「教育実践学」教育出版　・平山満義（編著）「質的研究法による授業研究」北大路書房　・三宮真智子（編著）「メタ認知」北大路書房　・浅田匡、生田孝至、藤岡完治（編著）「成長する教師」金子書房

カリキュラム開発特論　　久保田善彦

授業概要

幼稚園・小学校をベースにしたカリキュラム開発の意義を理解し、先進校の分析や開発した内容・方法に関する議論を通して、カリキュラムの開発・実施について、また、総合的な学習や特別活動と教科の関連を講義する。特に、同学年内の教科、総合的な学習、特別活動等の関係性（水平軸）と幼小の連携や学年間の関係性（縦軸）について事例をもとに考察を行う。そこで得られた知見をふまえて実際の教育現場のカリキュラムを検討する。また、自らがカリキュラムを作成することで、評価法を提案できることを目的とする。

授業計画

到達目標

１．幼稚園、小学校におけるカリキュラム編成の原理とその評価法が理解できる。
２．幼小連携カリキュラム開発の理論と方法についての理解ができる。
３．幼稚園、小学校の年間カリキュラムを作成し、評価法を提案することができる。

第 1 回	授業の趣旨・進め方について理解する。「カリキュラム開発の歴史」について概要を知る。教育実践におけるカリキュラム開発の意味を理解する。
第 2 回	「日本の学校の教育目標と教育課程」および「教育内容の組織化と学力」について講義した後、グループに分かれて「学力形成および人格形成」のあり方について討論する。
第 3 回	「教育課程における個性の位置づけ」について講義した後、グループに分かれて「個性」と「集団」の在り方とその方法について討論する。
第 4 回	「問題解決型の学習」について講義した後、グループに分かれて、総合や教科の「問題解決」に関する討論する。
第 5 回	「潜在的カリキュラム」について講義した後、グループに分かれて「潜在的カリキュラム」の意義と問題点について討論する。
第 6 回	「幼小の連携」について講義した後、グループに分かれて「幼小の連携」の意義と課題について討論する。
第 7 回	「学習のユニバーサルデザイン」について講義した後、グループに分かれて「特別支援と教育課程」の関連とその具体的手法について討論する。
第 8 回	「教育課程の評価」について講義した後、グループに分かれて「評価」の在り方と方法について討論する。
第 9 回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議①－開発過程の分析－
第 10 回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議②－校内研究における討議の分析－
第 11 回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議③－教育実践とカリキュラムとの関係分析－
第 12 回	カリキュラム開発先進校の分析の発表および討議④－結果の発表と討議－
第 13 回	カリキュラム開発の提案書の作成
第 14 回	カリキュラム開発の提案書の発表と討議
第 15 回	開発カリキュラムの発表および討議、振り返り

履修上の注意

本講義では，講義や各自の追求成果に対する議論から学ぶことを目的としている。そのため積極的に授業に参加することが求められる。また、知見を基に教育実践上の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

授業記録の提出物・研究協議後の省察レポート（50%）、追究活動での発言や成果発表等のパフォーマンス（50%）で評価する。

テキスト

教科書は特に用いない。資料は必要に応じて配布する。

教育メディア特論　　森田裕介

授業概要

本授業では、教育メディアの一つである映像メディアに着目し、その教育効果と問題点について体験的に学習するよう指導する。まず、教育メディアに関する基礎的な知識を習得するよう講義する。そして、実際に公共に放送されている教育番組や、インターネット上に配信されている動画コンテンツを事例として検証し、その効果と問題点を理解するよう講義する。次に、教育メディアを保育や授業に導入するために必要な技法を習得するよう指導する。続いて、教育メディアの効果を分析し、議論を通じて理解を深めるよう講義する。最後に、映像コンテンツのオープン化、ソーシャル・ネットワークとの関わり、ビデオゲームとの関わりなど、教育メディアに関わる社会的問題について議論を促し、理解が深まるよう指導する。

授業計画

到達目標

１．教育メディアを理解するための基礎的な知識を習得し、説明することができる。
２．教育メディアによる教育効果を理解し、保育・授業へ取り入れることができる。
３．教育メディアによる教育効果について、データを基に客観的に述べることができる。
４．教育メディアに関わる社会的な問題を理解し、議論をすることができる。

第 1 回	オリエンテーション　ミドルリーダーとしての力量と本授業の目的と進め方
第 2 回	教育メディアの基礎（1）分類と定義
第 3 回	教育メディアの基礎（2）人間の情報処理モデル
第 4 回	教育メディアの基礎（3）映像メディアと学習
第 5 回	教育メディアの事例（1）教育番組の事例
第 6 回	教育メディアの事例（2）動画コンテンツの事例
第 7 回	教育メディアの技法（1）コンテンツ設計
第 8 回	教育メディアの技法（2）コンテンツ制作
第 9 回	教育メディアの技法（3）コンテンツ配信
第 10 回	教育メディアの効果（1）質問紙調査による評価
第 11 回	教育メディアの効果（2）インタビューによる評価
第 12 回	教育メディアの効果（3）プレゼンテーション
第 13 回	教育メディアに関わる社会的問題
第 14 回	ディスカッション
第 15 回	まとめ

履修上の注意

授業では、ノート型 PC もしくはタブレットやスマートフォンなど、インターネットに接続可能なモバイル情報端末を使用する。また、知見を基に教育実践上の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

小 課 題（40%）　予習課題や復習課題の遂行について評価する。
レポート（60%）　文献やデータをもとにした論理的かつ客観的な記述について評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。参考文献は適宜紹介する。

子どもの言葉特論　　細川太輔

授業概要

幼稚園児（以下、園児）及び小学校児童（以下、児童）との「言葉」に関する実態を捉え、『幼稚園教育要領』（以下、『教育要領』）の「言葉」と『小学校学習指導要領』（以下、『指導要領』）との連携における課題とその対策について講義する。とりわけ、小１プロブレムと言われる児童の実態と課題、そして解決に向けて「言葉」という観点から講義する。

授業計画

到達目標

１．幼児教育から児童教育にかけての言語発達を捉え、幼稚園・小学校で言葉についての指導を研究できる。

２．幼稚園における保育内容・言葉の領域と小学校国語科における言語活動創出の方法を研究し指導計画を立てることができる。

第１回	オリエンテーション　本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標からの理解。及び、言葉に関する様々な文献・資料の紹介と解説。
第２回	日常生活における園児と児童の話し言葉に関する実態と課題
第３回	『教育要領』の歴史的変遷
第４回	『教育要領』「言葉」の内容と課題 ①
第５回	『教育要領』「言葉」の内容と課題 ②
第６回	園児の話し言葉と児童の話し聞く・書く・読む言葉との関連と実態と課題
第７回	『指導要領』の歴史的変遷
第８回	Ａ「話すこと・聞くこと」領域の内容と課題①―幼児期から小学校低学年―
第９回	Ａ「話すこと・聞くこと」領域の内容と課題②―小学校中学年・高学年―
第10回	Ｂ「書くこと」領域の内容と課題
第11回	Ｃ「読むこと」（文学的文章）領域の内容と課題
第12回	Ｃ「読むこと」（説明的文章）領域の内容と課題
第13回	小１プロブレムの実態と課題
第14回	小１プロブレムの対策と解決
第15回	園児と児童の「言葉」に関する有機的関連の在り方
第16回	定期試験

履修上の注意

参考書、参考資料を事前に読み、子どもの言葉に対する関心を深めて授業に臨むこと。
また、授業で得た知見を基に教育実践上の言葉の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

学生に対する評価

・定期試験50%、随時行う授業ごとのレポート50%

テキスト

テキスト：『保育内容・言葉　改訂版』日名子太郎監修　学芸図書
　　幼稚園教育要領　文部科学省，小学校学習指導要領解説国語編　文部科学省

参考書・参考資料等

岡本夏木『こどもとことば』　岩波新書
岡本夏木『ことばと発達』　岩波新書
内田伸子『子どもの文章：書くこと考えること』　東京大学出版会

子どもの数・図形概念特論　　齋藤　昇

授業概要

幼年期、児童期における数・図形概念の芽生え、発達、特徴について、実践例を交えながら理解できるよう講義する。特に、小学校の算数科授業において、子どもの創造性を伸ばすための山登り式学習法及び課題の解決場面において、多様に思考し新たなアイディアを生み出す発散的思考の活性化法について、その意義も含めて分かりやすく講義する。

授業計画

到達目標

１．幼児教育から児童教育にかけての数・図形概念の発達を捉え、幼稚園で数や図形概念の芽生えの表れを捉える目とそれを伸ばす指導法を設計できる。

２．幼児期から小学校及び小学校の発達段階を考慮し、創造的思考を活性化する算数科の授業計画を立てることができる。

第 1 回	ミドルリーダーとしての力量を到達目標から理解し、授業方法についてのガイダンスを行う。
第 2 回	子どもの認知構造と数概念の理解
第 3 回	子どもの認知構造と図形概念の理解
第 4 回	数概念の発達段階とその特徴
第 5 回	図形概念の発達段階とその特徴
第 6 回	子どもの認知構造と熟達者の認知構造
第 7 回	創造性の構造
第 8 回	創造的思考を活性化する山登り式学習法
第 9 回	山登り式学習法の実践例と効果
第 10 回	発散的思考を活性化する数分野の教材開発
第 11 回	発散的思考を活性化する図形分野の教材開発
第 12 回	創造的態度を育てる指導方法
第 13 回	創造性の評価方法
第 14 回	子どもの数概念を育てる指導計画の実際
第 15 回	子どもの図形概念を育てる指導計画の実際

履修上の注意

・授業は理解を深めるために講義の他に演習を行う。
・教材の開発、指導計画の作成等は、時間がかかるので授業時間以外の学習が必要である。

評価方法

授業への取り組み姿勢（30%）、課題報告（30%）、授業後に課すレポート（40%）によって評価する。

テキスト

・文部科学省、『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館
・文部科学省、『小学校学習指導要領解説総則編』、東洋館
・齋藤昇編、『「山登り式学習法」入門』、明治図書
・適宜資料を配付する。

子どもの科学認識特論　　長友大幸

授業概要

幼児期から児童期にかけての科学的認識の発達を捉え、小学校の理科の学習で扱う自然の事物・現象に関して、子どもの素朴概念や科学的概念・自然認識を探る手法を修得することを目標とし講義する。どのような教材、指導方法、指導過程が子どもの科学認識を揺さぶり、教育効果が期待できるのか等について先行研究の文献を基に考え、小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」および「B生命・地球」の双方において指導計画を立てて模擬授業を行うことができるようにする。

授業計画

到達目標

１．子どもがもつ素朴概念と科学的概念を探る研究手法を獲得することができる。
２．科学的概念・自然認識を揺さぶり、意欲を伸ばす指導法を考えることができる。
３．実感を伴った理解を導く理科授業の創出方法を研究し、指導計画を立て実践することができる。
４．理科教育、科学教育に関わる文献や論文の検索の方法を習得し、論文を収集できる。

第１回	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ　子どもが持つ素朴概念や科学的概念・自然認識とは何か理解し、本授業と教育実践との関わりを明確にする。
第２回	理科教育、科学教育に関わる文献検索の方法を習得し、科学的概念の形成や授業研究に係わる文献情報を収集する。
第３回	科学的概念の形成以前にもつ子どもの素朴概念とはどのようなものか、文献情報や討論を通じて把握する。
第４回	子どもの素朴概念が修正され、科学的概念が形成されることを、小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」における授業実践事例を通して理解する。
第５回	子どもの素朴概念が修正され、科学的概念が形成されることを、小学校理科内容区分「B生命・地球」における授業実践事例を通して理解する。
第６回	科学的概念や自然認識を揺さぶる授業の「導入」部分の指導計画を作成する。
第７回	科学的概念や自然認識を揺さぶる小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」の授業での「実験・観察、ものづくり」部分の指導計画を作成する。
第８回	科学的概念や自然認識を揺さぶる小学校理科内容区分「B生命・地球」の授業での「実験・観察、体験活動」部分の指導計画を作成する。
第９回	科学的概念や自然認識を揺さぶる授業の「まとめ」部分の指導計画を作成する。
第10回	小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」の指導計画の修正－討論・批判的検討から得た情報を基に修正－
第11回	小学校理科内容区分「B生命・地球」の指導計画の修正－討論・批判的検討から得た情報を基に修正－
第12回	摸擬授業①－小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」における模擬授業－
第13回	摸擬授業②－小学校理科内容区分「B生命・地球」における模擬授業－
第14回	摸擬授業での検討から指導計画の修正
第15回	まとめ　本授業での取り組みを振り返り、今後の授業実践への展望を考える。

履修上の注意

保育・教育者としての役割・ねらいをもってグループ活動に積極的に参加すること。また、各自の指導計画について、内容をまとめてプレゼンテーションを行うため、パワーポイント等のプレゼンテーションソフトの使用に慣れておくこと。なお，データー処理や分析方法，その他，質問や疑問等は，授業時間外の活用やメール等で適宜質問して指導を受け，解決に努めること。

評価方法

授業でのグループ討論発表に対する取り組み（20%）、模擬授業前に作成した指導計画の内容（20%）、模擬授業（30%）、模擬授業後に改善した指導計画の内容（30%）で評価する。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布する。

子どもの造形表現特論　　森本昭宏

授業概要

幼児期から児童期の造形表現の発達と教育、理論と実践を往還させながら、幼稚園及び小学校図画工作科における教育実践理論を講義する。幼小の連続性を重視した造形カリキュラムの研究、鑑賞教育と地域社会との連携、諸外国の造形教育について多面的に考察する。学校・家庭・地域社会など様々な芸術教育のあり方について深く学ぶとともに、芸術の教育者として幅広い見識と応用力を身に付けることをねらいとして講義する。

受講生は自ら研究テーマを設定、子どもたちが意欲的な創造活動が展開できる指導法についてグループ討議・発表する。教育現場における課題を析出して、造形表現を中心に実践と理論を結びつけながら考察、授業研究を進める力量を修得できるように指導する。

授業計画

到達目標

１．幼児期から児童期の表現の発達を捉え、個に対応した造形活動の指導法について理解する。
２．造形教育のあり方について深く学ぶとともに、教育現場における芸術活動の指導計画を立てる。
３．子どもの様々な表現方法についての研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用する。

第１回	オリエンテーション－教師の力量と、子どもの造形表現における「気づき」と「見立て」の援助のあり方の関係について理解する－
第２回	幼稚園教育と小学校教育の「造形遊び」学習の指導、授業研究、先行研究、国際的な比較研究など事例を基に支援のあり方について考察する。
第３回	身近にある自然物や材料、その形や色の特徴などから自分のイメージをもつ造形活動の題材の設定、導入について考察する。
第４回	感じ取ったことを話す、聞く、話し合うなどの活動を通して、表し方の変化や特徴などをとらえる学習活動と対話型鑑賞教育について考察する。
第５回	幼稚園や小学校、子どものいる施設等での参加型フィールドワークの現状や、表現活動の家庭・地域との連携、共同で行う創造活動について考察する。
第６回	諸外国に見られる親しみのある造形表現と子どもの創造性を伸ばす教授支援のあり方を考察する。（アジア・南米・オセアニア・西欧の造形教育など）
第７回	我が国や諸外国の自然や地域の人々の生活に結びつきながら継承された伝統的な造形の教材化と教育的意義について考察する。
第８回	図画工作科の領域の内容と構成、学習環境とその運営、評価活動のあり方や方法を理解する。
第９回	「絵で表す」学習指導と「立体で表す」学習指導の授業の構成、展開、評価について理解する。
第10回	題材開発にかかわる指導計画や指導案の導入と展開について理解を深める。安全配慮、環境構成の授業のあり方を学び、学習指導案を作成する。
第11回	感性と表現に関する領域「表現」と小学校図画工作の接続、小学校他教科との関連について考察する。
第12回	造形表現の単元設定を行い、学習指導案を作成する。作成した学習指導案に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。
第13回	図画工作科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。作成した学習指導案に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。
第14回	作成した単元設定に基づき、児童観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議、検討する。
第15回	作成した単元設定に基づき、児童観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議、検討する。

履修上の注意

教育者としての役割・環境・ねらいを具体的に定め、グループ活動に積極的に参加すること。
また、授業内で視聴した映像・子どもの造形作品についてのミニレポートに取り組むこと。

評価方法

授業におけるグループ討議の内容（40%）とレポート（60%）で評価。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布。

子どもと道徳特論　　吉村日出東

授業概要

本授業を通して、現代社会の基本理念である人間尊重の精神、個人の尊厳などについて、幼児期から理解を深められる道徳教育を考察する。そのため、本授業においては、道徳教育を①社会との関連、②人間尊重の精神、③子どもの発達段階における認識、④授業の創出の 4 つの観点から講義を行い、それぞれのテーマの理解を深める。

授業計画

到達目標

１．社会の変動、価値観の推移の中にあって、価値観とは何かを自ら探究できるようになる。
２．現代社会の理念である人間尊重の精神の理解を深め、道徳指導の基本原理となるようにする。
３．幼児期から青年期までの道徳観の発達を捉え、発達相応の道徳教育を探究できるようになる。
４．幼稚園・小学校における道徳教育について常に工夫し、指導計画を立てられるようになる。

第 1 回	本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標から理解し、現代社会が期待する道徳とは何か（社会に生きる子どもの規範）を探求する
第 2 回	社会科と道徳教育：社会を認識し、社会通念を理解し、価値判断を行う
第 3 回	社会変化に伴う価値観の変化と道徳①：教育勅語、修身科を探求する
第 4 回	社会変化に伴う価値観の変化と道徳②：伝統と文化、歴史観を探求する
第 5 回	人権教育と道徳教育①：人権教育の類型
第 6 回	人権教育と道徳教育②：部落差別に対峙する
第 7 回	人権教育と道徳教育③：外国人差別に対峙する
第 8 回	宗教教育と道徳教育：宗教的価値観と国民道徳の相克
第 9 回	子どもの発達と道徳①：幼・小・中、学校段階に応じた道徳とは何か
第 10 回	子どもの発達と道徳②：コールバーグ理論を探求する
第 11 回	子どもの発達と道徳③：コールバーグ理論を使った道徳教育の実践
第 12 回	幼稚園における道徳教育：良いこと悪いこと、みんなが守ること
第 13 回	小学校における「道徳教育の内容」①：発達に伴う内容の深化
第 14 回	小学校における「道徳教育の内容」②：個人から社会へ
第 15 回	全体のまとめとしての討論：これまでの実践経験を理論化してみる

履修上の注意

授業は毎回関連しているので、欠席しないこと。また機会を見つけて授業見学に赴くことがあるので、参加すること。なお、道徳教育の基本となる学習指導要領の道徳領域に関しては、学部段階で身につけているものとして講義する。また、授業で得た知見を基に教育実践上の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

評価方法

4 つの観点ごとに課すレポート及び最終回に提出する研究レポートによって評価する。観点別のレポート（40%）、最終レポート（60%）で評価。

テキスト

授業テーマは多岐にわたるので、プリントを用意します。各回で紹介した参考文献については、積極的に目を通しておくこと。

小学校授業実践演習　　梅澤　実・細川太輔

授業概要

授業を教師と学習者の相互作用としての教授学習過程として捉え、小学校における将来のミドルリーダーとしての資質を培う視点から、授業実践記録（逐語文字記録・映像記録等）をもとに、教授学習過程を教材内容と学習課題、学習活動の設定、教師の発問系列・構成等から分析し、教師としての授業分析力を高め、「わかる」授業を実現できる力量を修得する。本授業は、研究者教員及び教育実践に精通した実務家教員が共同で授業を進める。研究者教員による理論的分析と実務家教員による臨床的視点からの分析を通して、受講者・実務科教員・研究者教員で議論し、単元計画作成、授業省察を行う。

授業計画

到達目標

１．教室での教授行動と児童の学習過程を理論と実践を往還しながら授業を分析できる。

２．自らの研究目的に適した授業分析方法の選択、開発を行うことができる。

第１回	オリエンテーション　理論と実践の往還による「わかる」授業を設計について講義し、これからの学習計画と受講者の心構えを理解する。
第２回	学習指導要領における新しい学力観の捉え方（思考力・表現力）と各教科における言語活動との関係について考察する。
第３回	授業記録をもとに、授業は教師と学習者が相互に学びあう過程として捉え、学び合いの効果と教授行動を分析し、シミュレーションを通してし合う。
第４回	授業記録をもとに、学習過程が学習成果に及ぼす影響や、学習の質を学力・意欲の関係から分析し、シミュレーションを通して評価し合う。
第５回	授業記録をもとに、問題解決学習における児童の認知と情意を分析し、問題解決を促す支援のあり方について考察する。
第６回	授業記録をもとに、協同学習過程の効果を高める要因について分析し、協同学習過程における教授支援のあり方を考察する。
第７回	教室内言語の観点から授業を分析し、伝え合う力の育成と人間力育成の関係についてロールプレーを取り入れ考察する。
第８回	授業記録をもとに、学習者に学習をモニタリングする手がかりとなる評価活動のあり方や方法を考察する。
第９回	国語科の単元設計を行う。学年の発達段階を考え、「わかる授業」をめざし、児童の学習活動とそこでの学びをシミュレーションしながら作成する。
第10回	作成した国語科の単元設計に基づき、授業を実施し、評価する。
第11回	算数科の単元設計を行う。学年の発達段階を考え、「わかる授業」をめざし、児童の学習活動とそこでの学びをシミュレーションしながら作成する。
第12回	作成した算数科の単元設計に基づき、授業を実施し、評価する。
第13回	「総合的な学習の時間」の単元設計を行う。育てようとする資質や能力及び態度を明確にし、児童の学習をシミュレーションしながら作成する。
第14回	作成した「総合的な学習の時間」の単元設計に基づき、再度シミュレーションを行い単元構成の妥当性、地域との連携、教材の開発などを検討する。
第15回	まとめ　授業実践について自らの力量を評価し、今後の課題を捉える。

履修上の注意

教師としての態度を意識し、授業に臨むこと。各回、授業内容をもとに自らの教育実践力量を省察し、その省察を記録し、次時に教育実践力量を更に深化させるといった、教育実践力量を省察する視点の獲得と省察の習慣をつけること。

評価方法

授業分析における積極的姿勢（40%）と模擬授業などによる自己評価における省察の深まり（60%）で評価する。

テキスト

適宜授業において配布する。

幼稚園教育実践演習　　金谷有子・小川房子

授業概要

本演習の目的は、幼稚園教育における教育成果を高める保育・教育の要件とその評価法を開発できる力を養成することである。理論的観点のみならず実践的臨床的観点から保育・教育の問題を考察していく。そのための資料として保育場面で収集された子ども同士や保育者と子どもとのやりとりのエピソード、あるいは保育者による保育・教育実践に関するナラティブなどを用いる。さらに演習から学んだ知識を実践知として深めていくために模擬保育を行う。本授業は、研究者教員と幼稚園教育に精通した実務家教員が共同で進めていく。

授業計画

到達目標

１．事例や資料を検討することで幼稚園での教育成果を高める方法を考えること
２．事例や資料を検討することで問題解決への的確な提案が出来ること
３．模擬授業によって実践知を深めること

第 1 回	オリエンテーション：講義科目での学びの振り返りと、本演習の目的と方法の説明、院生各自の問題意識の確認
第 2 回	幼稚園教育の現代的問題を探る：問題探究の視点と方法
第 3 回	幼稚園教育における理論と実践を考える（1）子どもの遊びに関するエピソードの分析と検討
第 4 回	幼稚園教育における理論と実践を考える（2）子どもと自然に関するエピソードの分析と検討
第 5 回	幼稚園教育における理論と実践を考える（3）子どもの学びに関するエピソードの分析と検討
第 6 回	幼稚園教育における理論と実践を考える（4）保育者と子どもの愛着関係に関するナラティブの分析と検討
第 7 回	幼稚園教育における理論と実践を考える（5）保育者同士の関係性に関するナラティブの分析と検討
第 8 回	幼稚園教育における理論と実践を考える（6）保育者と保護者に関するナラティブの分析と検討
第 9 回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（1）子どもの個性の育ちと対応
第 10 回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（2）子どもの食と健康
第 11 回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（3）保育環境と生活
第 12 回	幼稚園教育における臨床的問題を考える（4）保育者の資質向上
第 13 回	模擬保育（1）エピソード分析・ナラティブ分析の応用としての実践及び評価
第 14 回	模擬保育（2）臨床的問題への応用としての実践及び評価
第 15 回	まとめ：教育成果を高める方法と評価法の開発に向けて

履修上の注意

さまざまな事例や資料に対して、理論面や実践面から自分の意見をもって積極的に発言し専門性を高める努力をしてほしい。また、各回、自らの教育実践力量を省察し、その省察を記録し、次時に教育実践力量を更に深化させるといった、知見をもとに教育実践を省察する習慣をつけること。

評価方法

演習中の発言や積極的参加態度（40%）、模擬授業などによる自己評価における省察の深まり（60%）で評価。

テキスト

適宜プリントや資料を配布する。必要な文献は適宜指示する。

教材・環境開発演習　　長友大幸・森本昭宏

授業概要

小学校の各教科の学習への基礎を培う幼稚園教育と小学校各教科における学習活動を高める教材開発・環境開発の方法について学ぶ。特に学習者の思考を高めることをねらいとした教材開発を受講者各自が行い、模擬授業を通して教材の教育効果の検証や実践的な理解を深める。本授業は、幼児期から児童期の子どもの発達を縦の流れとし、各教科を科目横断的に捉え、理論と実践を往還しながら複数教員による指導を行う。また、環境教育と体験学習、造形教育と教材製作を中心に、指導計画の立案と実施、評価などを行う。

授業計画

到達目標

1．幼児期から児童期の発達を捉え、学習への基礎を培う教材開発と環境開発の方法を修得することができる。また、学習活動を高める教材開発に必要な科学的概念を修得することができる。
2．小学校教員としての教材づくり、指導計画の立案と実施、評価を行うことができる。
3．事例を用いて教材の効果を分析・考察する手法を身につけ、研究や考察を理論と結びつけて自らの教育実践・発表に応用することができる。

第 1 回	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ　講義科目での学修の振り返りと、教材・環境開発を行う上でのこれからの学習計画、受講生の心構えを理解する。
第 2 回	小学校各教科と幼稚園教育の目標と内容、5 つの領域（健康、人間関係、言葉、環境、表現）編成とそのねらいと教材・環境の関わりを理解する。
第 3 回	幼児教育とその後の階梯である小学校教育の教科指導について学ぶ。主として幼児教育に関わる保育内容と環境と指導法について考察する。
第 4 回	幼児教育に関わる教材開発や授業研究等、先行研究、国際的な比較研究など事例を基に支援のあり方について考察する。
第 5 回	幼稚園や子どものいる施設等での長期の観察・参加型フィールドワークの現状や分析活動など、保育・教育現場における教材開発の実際について考察する。
第 6 回	グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動のあり方や方法を議論する。
第 7 回	小学校学習指導要領の「総合的な学習の時間」における問題の解決能力と主体的な探究活動について、教材開発の事例をもとに議論する。
第 8 回	「総合的な学習の時間」の横断的・総合的な学習を展開するための理論と教材開発の具体的な方法、環境設定や環境配備等について議論する。
第 9 回	開発題材にかかわる指導計画や指導案の導入と展開について理解を深める。安全配慮、環境教育の授業のあり方を学び、学習指導案を作成する。
第 10 回	自然や身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」と小学校理科の関連について理解する。理科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。
第 11 回	作成した理科の単元設定に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。評価活動のあり方や方法について学ぶ。
第 12 回	感性と表現に関する領域「表現」と小学校図画工作の関連について理解する。図画工作科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。
第 13 回	作成した図画工作科の単元設定に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。評価活動のあり方や方法について考察する。
第 14 回	児童観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議、検討する。
第 15 回	地域との連携、教材開発の今後の展望について討議、発表のまとめを行う。

履修上の注意

保育・教育者としての役割・環境・ねらいを具体的に定め、グループ活動に積極的に参加すること。自己のグループ活動におけるコミュニケーション力量を省察し、その省察を記録し、次時に生かすこと。

評価方法

授業における教材開発の内容とレポート（50%）、発表会（50%）で評価する。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布する。

いじめ・自殺・不登校問題演習　　松永幸子・増南太志

授業概要

現在、学校で起きているいじめや自殺、不登校について、理論と実践の両面から学ぶ。いじめなどの人権問題、自殺や不登校の対応を海外も参考にしながら探求する。また、いじめや自殺を防ぐための模擬授業体験や、ロールプレイによりカウンセリングをするなども取り入れ、理論と実践の往還による専門知識の獲得を目指すように指導する。本授業は、心理学と教育学を専門とする 2 名の教員により、各テーマについて複数の視点から分析・考察できるようにする。

授業計画

到達目標

1．幼稚園や小学校からいじめをなくすため、人権や情念について理論的に学び、指導法の立案と実施、評価法を研究することができる。
2．小学校におけるいじめを早期に発見し、対処するための学級経営の実施と評価法を研究することができる。
3．小学校における自殺・不登校対策を研究することができる。

第 1 回	オリエンテーション　本演習の目的と方法、及び、受講生の心構えを理解する。
第 2 回	いじめ・自殺・不登校についての理論
第 3 回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読（1）人権といじめ
第 4 回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読（2）人権といじめ・不登校
第 5 回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読（3）情念と自殺
第 6 回	受講生による問題意識の提示
第 7 回	受講生による問題意識の発表と明確化
第 8 回	受講生のよる問題意識の探求と発表
第 9 回	ロールプレイング（1）カウンセリング体験
第 10 回	ロールプレイング（2）カウンセラー体験後の考察
第 11 回	問題行動に対する授業と教材（1）授業方法について
第 12 回	問題行動に対する授業と教材（2）教材の検討
第 13 回	問題行動に対する授業と教材（3）模擬授業体験　理論と実践の統合
第 14 回	問題行動に対する授業と教材（4）模擬授業の考察
第 15 回	全体のまとめ

履修上の注意

講読した文献ごとに要約し、再考する。

ロールプレイやグループ活動における自己のコミュニケーション力量を省察し、その省察を記録し、次時に生かすこと。

評価方法

各回のまとめ、模擬授業、レポート内容から、理論と実践の往還により各自の問題意識が深化されたかにより評価する。各回のまとめ（30%）、模擬授業（30%）、レポート内容（40%）。

テキスト

授業時に指示する。

地域連携プロジェクト演習　　堀田正央・杉浦浩美

授業概要

学校・行政・NPO 等の地域における子育て支援・保育・教育等への取組みについて、事例検討や見学を通じて、地域連携プロジェクトへむけた具体的な方法論と課題を学んで行く。また子育て支援、幼保小連携、特別なニーズを持った子どもへの保育・教育等について、地域連携プロジェクトを立案・実施・評価する演習を通じて、社会全体で子どもを保育・教育することにむけた専門性を涵養する。

本授業は地域連携において必須となる複数の分野にまたがる専門職間の連携等を想定し、専門分野が異なる研究者が共同で行う。このことにより、複数の視点やニーズに基づいたバイアスの除去や分野間のアコモデーションのあり方の実際を学ぶ。

授業計画

到達目標

1．地域における行政・NPO 等の取組みの現状と問題点を知る。
2．既存のプロジェクトについて、見学・参加し、プロジェクト運営の方法論を知る。
3．プロジェクトを立案・実施・評価するプロセスを通じ、地域連携にむけた教育者としての専門性を養う。
4．地域のニーズの多様さを知り、複数の分野の専門職が連携することの重要性を理解する。

第 1 回	保育・教育における地域連携の必要性と課題、及び、受講生の心構えを理解する。
第 2 回	学校・行政・NPO 主体の地域連携プロジェクト事例検討・1(子育てサロン)
第 3 回	学校・行政・NPO 主体の地域連携プロジェクト事例検討・2(幼保少連携)
第 4 回	学校・行政・NPO 主体の地域連携プロジェクト事例検討・3(特別なニーズを持った子どもへの保育・教育)
第 5 回	学校・行政・NPO 等への見学・インタビュー
第 6 回	学校・行政・NPO 等への見学・インタビュー報告レポート
第 7 回	地域連携プロジェクトのためのテーマ抽出
第 8 回	地域連携プロジェクト計画演習・1 地域における保育・教育ニーズの観点から（教師・保育者としての学校外を含んだ幼児・児童を持つ家庭への支援の視点）
第 9 回	地域連携プロジェクト計画演習・2 先行するプロジェクトの評価の観点から（教師・保育者としての専門性をどう活用しているか、教育的改善にどう繋がったかの視点）
第 10 回	地域連携プロジェクト計画演習・3 プロジェクトの妥当性と成果予測の観点から（目的の明確化や妥当性・信頼性の視点、教育的成果を指導計画等にどう活かしていくかという継続性の視点）
第 11 回	地域連携プロジェクト企画プレゼンテーション
第 12 回	地域連携プロジェクト実施・1
第 13 回	地域連携プロジェクト実施・2
第 14 回	地域連携プロジェクト事後評価
第 15 回	地域連携プロジェクトの改善点と今後の課題（学校教育との連携の視点から）

履修上の注意

授業時間外の学外見学等を行うことがある。
演習科目であることから、主体的かつ積極的に取り組みこと。
授業内で複数回のレポート、プレゼンテーションを課すことがある。
プロジェクとの計画・実施においては常に「教師・保育者」としての視点を持つこと。

評価方法

各演習・実習への取組み（30%）、計画書（30%）・レポート（40%）により評価する。

テキスト

特に定めない。授業内で適宜資料を配布する。

教育課題研究Ⅰ　　梅澤　実

授業概要

各自の授業実践に関する問題意識に基づき、国内外の基礎文献の講読、大学院生同士の議論を踏まえ、問題意識を精緻化し、研究テーマの明確化と研究計画の作成を図る。そして、授業実践研究に関する論文で独創性を発揮できる研究姿勢の基礎を体得した上で、修士論文の性格を自覚した論文執筆の心構えを身につける。

授業計画

到達目標

１．「問題意識」を精緻化し、「課題意識」と「研究テーマ」を明確にする。
２．「研究計画」を作成する。
３．修士論文執筆における独創性を発揮した研究姿勢を体得し、論文執筆の心構えを形成する。

第 1 回	オリエンテーション－－授業実践に関する「問題意識」を発表し合う。
第 2 回	「問題意識」から「課題意識」へ－「問題意識」を研究レベルで捉え直し、「課題意識」を明確化する。参考文献の検索を次回までの課題とする。
第 3 回	「研究計画」（第 1 次）の作成と研究ノートの作成－検索した参考文献を検討し、第 1 次「研究計画」を作成する。また、研究ノートの作成方法を学ぶ。
第 4 回	研究問題に関連した文献の講読と議論－検索した参考文献の講読と議論。さらに参考文献を収集することを次回までの課題とする。
第 5 回	「課題意識」の検討－「研究計画」（第 1 次）の「課題意識」をもとに検索した文献を検討し、「課題意識」を検討する。
第 6 回	教育学理論と教育実践の結合－取り組む課題が、「ミドルリーダー」の資質を保証する資格であるか検討する。
第 7 回	「研究計画」（第 2 次）の作成－「課題意識」の構成と第 6 回の授業から第 2 次「研究計画」を検討する。
第 8 回	「研究計画」（第 3 次）の作成－参考文献を第一・二次情報の選別を検討し、「研究計画」（第 3 次）の修正を検討する。
第 9 回	「研究計画」（第 4 次）の作成－「課題意識」を議論し、修正を加え、第 4 次「研究計画」を作成する。
第 10 回	「研究計画」（第 5 次）の作成－「課題意識」の構成を検討し、修正を行い、それに基づく第 5 次「研究計画」作成する。
第 11 回	議論と自己課題への省察－「研究計画」（第 5 次）と参考文献をもとに、自己の課題への省察を行う。省察を踏まえ、第 5 次「研究計画」を修正する。
第 12 回	「研究計画」（第 6 次）の作成－自己課題への省察をもとに研究課題を明確にし、第 6 次「研究計画」を作成する。
第 13 回	「研究計画」（第 7 次）の作成－教育関連学会の研究論文を参照し、教育学研究における修士論文の性格を理解し、第 7 次「研究計画」を検討する。
第 14 回	「研究テーマ」と「研究計画」の確定－「研究計画」（第 7 次）と「課題意識」からの「論文題目」を検討し、「研究テーマ」と「研究計画」を確定する。
第 15 回	まとめ－教育課題研究Ⅱに向けての整理

履修上の注意

□各回修了後、研究経過を研究ノートにまとめる。
□講読した文献ごとに内容をまとめる。
□修士号請求論文内容には独創性が求められるが、その独創性は、論文執筆者が日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高め、それに基づく「研究計画」に支えられる。「問題意識」を大事に育み、強く維持し続けること。

評価方法

各回の研究経過のまとめにより、問題意識が深化・明瞭化されたかにより評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

教育課題研究Ⅰ　　渡邊光雄

授業概要

国内外の基礎文献の輪読等を踏まえ、修士号請求論文執筆当事者の問題関心を精緻化した上で研究テーマの明確化と研究計画の作成を図る。また、教育方法学分野の論文執筆で独創性を発揮させる研究姿勢の基礎を体得した上で、修士論文の特徴を自覚した論文執筆の心構えを身に付ける。

論文執筆当事者が、自らの「研究計画」と「課題意識」を精緻化する中で独創性を発揮する研究姿勢の基礎を教育方法学研究様式（規範的、記述的、処方的な各モデル）に即して体得し、教育方法学関連の研究論文および国際的な研究ハンドブック等を参照しながら、教育学の修士、学士、博士の各論文の間の質的相違、旧「教育学修士」と現行の「修士（教育学）」との違い（社会的位置づけの違い）、そして、修士段階の「専門職学位」と「研究学位」の違いを踏まえた上で、教育方法学分野における修士論文それ自体の性質を理解し、修士号請求論文執筆に取り組む態勢を整えるための研究指導を行う。

授業計画

到達目標

１．「問題意識」を精緻化し、「課題意識」と「研究テーマ」を明確化する。
２．「研究計画」を作成する。
３．論文執筆における独創性を発揮した研究姿勢を体得する。
４．論文執筆の心構えを形成する。

第１回	事前提出の「研究計画」とそこでの「問題意識」（日常的疑問）を、教育方法学研究様式（規範的、記述的、処方的な各モデル）に基づいて整理する。
第２回	事前提出の「研究計画」（第０次）を修正した第１次「研究計画」を作成し、「問題意識」を「課題意識」（学問的疑問：第１次「課題意識」）にまとめる。
第３回	教育方法学研究様式及び参考情報検索を踏まえて第１次「研究計画／課題意識」を修正し、第２次「研究計画／課題意識」を作成する。
第４回	第２次「研究計画／課題意識」の修正を、教育方法学研究様式及び参考情報検索に基づいて行い、第３次「研究計画／課題意識」を作成する。
第５回	教育方法学研究様式に基づく参考情報検索結果の第一･二次情報選別を踏まえて第３次「研究計画／課題意識」を修正し、第４次「研究計画／課題意識」を作成する。
第６回	教育方法学研究様式に基づく参考情報検索結果の第一･二次情報選別を踏まえて第４次「研究計画／課題意識」を修正し、第５次「研究計画／課題意識」を作成する。
第７回	教育方法学研究様式に基づく参考情報検索結果の第一･二次情報選別を踏まえて第５次「研究計画／課題意識」を修正し、第６次「研究計画／課題意識」を作成する。
第８回	国内外教育方法学論文の参照と、教育学･教育方法学の修士論文と学士･博士論文の質的相違の検討を踏まえ、第６次「研究計画／課題意識」を修正する。
第９回	修士論文の「学位プログラム」上の位置付けを踏まえ、第６次「研究計画／課題意識」の修正作業を継続し、第７次「研究計画／課題意識」を作成する。
第10回	国内外教育方法学論文の参照と、旧「教育学修士」と現行「修士（教育学）」の相違の検討を踏まえ、第７次「研究計画／課題意識」を精緻化する。
第11回	旧「教育学修士」と現行「修士（教育学）」との違いに基づく第７次「研究計画／課題意識」の修正を行い、第８次「研究計画／課題意識」を作成する。
第12回	国内外教育方法学論文を参照し、修士段階の「専門職学位」と「研究学位」の違いを踏まえて、第８次「研究計画／課題意識」の内容を検討する。
第13回	教育の理論と実践の結合の専門家「ミドルリーダー」の資質（「専門職学位」修得相当）の観点から第８次「研究計画／課題意識」を修正し、第９次「研究計画／課題意識」を作成する。
第14回	国内外教育方法学論文の水準と修士論文（「専門職学位」相当）の特質の観点から第９次「研究計画／課題意識」を修正し、教育方法学研究様式に即した第10次「研究計画／課題意識」を作成する。
第15回	第10次「研究計画／課題意識」と「論文題目」原案に基づく「研究テーマ」と「研究計画」を確定する。

履修上の注意

修士論文容に求められる独創性は、論文執筆当事者の日常的な「問題意識」を高めた研究レベルの「課題意識」に基づく「研究計画」に支えられる。論文執筆当事者にしかない当該「問題意識」内容を「課題意識」に高める程度によって論文の独自性は左右される。1年次における「問題意識」を論文完成時まで強く抱き続けるように留意して授業を履修することが求められる。

評価方法

毎回の授業でのレポート提出とそれに基づく授業中の議論への参加状況に基づいて評価する。

テキスト

Wittrock, M.C. (Ed.). (1986).　Handbook of research on teaching. American Educational Research Association, 3rd ed.
日本教育方法学会紀要 教育方法学研究

教育課題研究Ⅰ　　金谷有子

授業概要

1 年前期の成果を踏まえながら大学院生自身が子ども教育の課題と実践に関する研究テーマを明確にし、研究計画を作成できるように指導を行う。関連分野の国内外の論文および優れた教育実践報告書の講読と討議を行う。大学院生各自が独創性を発揮させる研究姿勢の基礎を体得し、修士論文執筆の心構えを身につける。

授業計画

到達目標

１．理論と実践研究を学び、各自の問題意識を明確にする。
２．独創性を発揮した研究姿勢を体得し、論文執筆の心構えを形成する。
３．修士論文のテーマを選定し、研究計画を作成する

第 1 回	オリエンテーション：院生各自が問題意識を文章化し、整理する。それに基づいて今後の研究計画の進め方を指導する。
第 2 回	問題意識の明確化：文献リサーチの方法を指導する。
第 3 回	文献リサーチと第 1 次「研究計画」の作成：検索した文献を参考に第 1 次「研究計画」を作成する。この計画に基づき国内外の関連文献のリサーチを続ける指導を行う。
第 4 回	研究計画に関連した文献の講読と討議：問題意識に基づいて文献の講読と討議を行う。
第 5 回	研究計画作成（第 2 次）：前回の文献講読と討議を踏まえて各自の研究計画を見直す。
第 6 回	理論と教育実践の結合：文献リサーチを通して理論と実践の結合を考える。
第 7 回	文献講読と討議および研究計画作成（第 3 次）：各自の問題意識や研究テーマの再検討。
第 8 回	文献講読と討議および研究計画作成（第 4 次）：理論と必要な研究計画の見直し・修正
第 9 回	実践研究論文講読と討議および研究計画作成（第 5 次）：理論に基づいた実践研究論文の講読と討議を行う。理論と実践の検討をしながら研究計画の見直しと進行を行う。
第 10 回	実践研究論文講読と討議および研究計画作成（第 6 次）：理論に基づいた実践研究論文の講読と討議を続ける。理論と実践の検討をしながら第 5 次研究計画の見直しと進行を行う。
第 11 回	研究テーマ選定のための省察：これまでの経過を踏まえて自己の研究テーマ選定のために足りない部分を省察する。
第 12 回	研究計画作成（第 7 次）：前回行った省察をもとに研究テーマを明確にし、研究計画を深化・精緻化させる。
第 13 回	研究計画作成（第 8 次）：前回の作業を再検討し、研究テーマと研究計画の最終検討を行う。
第 14 回	研究テーマと研究計画の確定：教育課題研究Ⅱに向けて研究テーマと研究計画を決定する。
第 15 回	まとめ：決定したテーマと研究計画に基づいて中間発表の準備を行う。

履修上の注意

自分の問題意識を明確にしていくために毎回修了後、研究経過を研究ノートにまとめる。
講読した文献や実践報告書の内容をまとめる。
日常的な問題意識を研究レベルの問題意識に深化・明確化していく。

評価方法

毎回のまとめとテーマ選定および研究計画の経過から総合的に評価する。

テキスト

毎回必要な文献を紹介する。またプリント資料を配布する。

教育課題研究Ⅰ　　吉村日出東

授業概要

道徳教育及び実際の教育問題について歴史的視野に立って研究できるよう指導するものである。このため修士論文作成においては、歴史研究及び社会調査法に基づいて調査研究を行い、論文執筆に向けていく。修士論文のテーマの確定から対象となる資料についての理解を深め、研究の正しい方法を身につけられるまで指導を行う。

授業計画

到達目標

１．修士論文のテーマを確定する。
２．歴史研究、社会調査の基本について整理する。
３．自己の研究課題にとって適切な研究方法を確定する。
４．修士論文作成までの研究計画を作成する。

第 1 回	修士論文作成に向けて：今後の日程などを確認する。
第 2 回	研究及び論文の執筆とは①：研究方法の分類について整理する。
第 3 回	研究及び論文の執筆とは②：歴史研究について検討する。
第 4 回	研究及び論文の執筆とは③：社会学的方法について検討する。
第 5 回	研究及び論文の執筆とは④：論文執筆で守るべきことについて指導する。
第 6 回	研究テーマについて①：現在考えているテーマを発表する。
第 7 回	研究テーマについて②：テーマに関する研究動向について発表する。
第 8 回	先行研究の分析①：学術論文の研究方法を分析する。
第 9 回	先行研究の分析②：学術論文の構成を分析する。
第 10 回	先行研究の分析③：研究資料について考察する。
第 11 回	自己の主要な研究方法は何か：研究手法を確定する。
第 12 回	研究計画書の作成①：研究の対象となる資料について検討する。
第 13 回	研究計画書の作成②：調査方法について確認する。
第 14 回	研究テーマと実際教育に乖離はないか①：教育現場での見学とヒアリング
第 15 回	研究テーマと実際教育に乖離はないか②：教育現場見学の報告とテーマ修正

履修上の注意

本担当者は、子どもの社会認識、価値観形成にかかわる分野の研究者である。このことをよく確認の上、修士論文の課題を決定すること。

評価方法

授業の各回で取り上げた研究に関する技法について理解できているか(内容理解)、また、研究テーマの深まりなどを総合的に評価する。

テキスト

斉藤孝『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部
今井登志喜『歴史学研究法』東京大学出版会
その他、必要に応じてプリントを配布する。

教育課題研究Ⅰ　　松永幸子

授業概要

教育学の専門的知識を基に、各自で課題を設定するため、国内外の文献講読や資料収集を行う。議論を通して論文の専門性を高めると同時に、資料収集、マイクロフィルムの焼付け等、一次資料を扱い読み解く技能を身に付け、研究計画書を作成する。

授業計画

到達目標

１．修士論文の作成に向けて、問題意識の深化を図る。
２．必要な資料を収集し、マイクロフィルムからの一次資料の焼付け方法等、具体的作業能力を身につける。
３．修士論文に向けた研究計画の作成と精鋭を行う。

第 1 回	オリエンテーション　本授業についての説明と問題意識の提示
第 2 回	受講生による問題意識の提示　現在の問題意識を文章化する。
第 3 回	受講生による問題意識の提示と検討　文章化された問題意識を発表する。
第 4 回	研究課題の検討　研究課題について、教員、他の受講生と検討し合う。
第 5 回	研究課題に関連した文献の探索　文献の適格性について議論する。
第 6 回	研究課題に関連した文献の探索と検討
第 7 回	研究課題に関連した文献の探索と焼付け作業を行う。
第 8 回	先行研究の探索　先行研究や資料のデータベース化
第 9 回	先行研究の検討　先行研究と独自性についての議論
第 10 回	先行研究の講読と議論　先行研究の妥当性
第 11 回	先行研究批判　先行研究と独自性について
第 12 回	論文の独自性についての議論
第 13 回	論文の独自性についての議論と検討
第 14 回	研究計画書の作成（第 1 次）前回までの先行研究や独自性についての議論を基に、研究計画書を作成する。
第 15 回	研究計画書の検討（第 2 次）第 1 次の研究計画の見直しと修正をし、第 2 次研究計画書を作成する。

履修上の注意

授業時に扱う文献のみならず、授業に関連する他の多くの文献を講読してのぞむこと。

評価方法

文献講読、レポート等による研究テーマの深まり等、総合的に評価する。

テキスト

適宜、資料を配布する。

教育課題研究Ⅰ　　長友大幸

授業概要

理科教育・環境教育の実践研究や授業研究に関する文献及び教材開発の実践事例を収集し、その内容についての討論・批判的考察を行う。そして、理科教育・環境教育の今日的課題を把握するとともに実践研究の方法を修得し、修士論文の研究テーマの決定、研究計画の作成ができるよう指導する。

授業計画

到達目標

１．理科教育・環境教育に係わる文献や実践事例をもとに討論し、批判的に考察することができる。
２．理科教育・環境教育に係わる実践研究の方法を修得することができる。
３．修士論文の研究テーマを決定し、研究計画を作成することができる。

第１回	修士論文作成に向けたガイダンスを行い、論文作成の手法を確認する。
第２回	理科教育に係わる研究の歴史と近年の動向を整理する。文献収集の方向性を明確にする。
第３回	環境教育に係わる研究の歴史と近年の動向を整理する。文献収集の方向性を明確にする。
第４回	理科教育・環境教育に対する学生がもつ問題意識を整理する。また、問題解決に係わる情報を収集するための文献検索を行う。
第５回	検索した文献をもとに、学生がもつ問題意識を修士論文で扱う学術的課題として整理する。
第６回	整理された学術的課題について、その基になった自身の問題意識や文献情報を示しながら発表・討論し、研究テーマを検討する。
第７回	各自が考えた研究テーマに対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に研究テーマを再考する。
第８回	各自が再考した研究テーマについて、その基になった自身のもつ課題や文献情報を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに研究テーマを決定する。
第９回	研究テーマに対して、文献に基づく根拠をもった研究目的を示しながら発表・討論し、研究計画を検討する。
第10回	各自が考えた研究計画に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に研究計画を再考する。
第11回	各自が再考した研究計画に対して、再修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得られた情報を基に研究計画の精緻化を図る。
第12回	再修正された研究計画について、文献情報をもとに整理・確認して研究計画を決定する。
第13回	研究テーマ・研究計画及び討論・批判的検討から得られた情報を基に論文題目の原案を作成する。
第14回	各自が考えた論文題目の原案に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に論文題目の原案を決定する。
第15回	論文題目の原案、研究テーマ、研究計画の係わりが適切であるかどうか検討する。討論・批判的検討から得た情報を基にそれぞれを確定する。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

各自の研究テーマの発表内容、研究への意欲などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

教育課題研究Ⅰ　　堀田正央

授業概要

1年前期の成果を踏まえ、国内外の文献を輪読と討議を通じて修士論文にむけた研究テーマを明確にする。また各文献の研究方法についての妥当性・信頼性を検討しながら、仮説検証型の研究に耐えうる社会調査法、統計法の基礎的な能力を養い、科学的な根拠が意識された修士論文研究計画を立て得るように指導する。

授業計画

到達目標
1．修士論文にむけた研究テーマを見出す。
2．質的・量的な社会調査法および統計法を取得する。
3．修士論文にむけた研究計画を立案する。

第1回	関心のあるテーマの発表と、修士論文への妥当性の検討
第2回	関心のあるテーマについての文献講読と討議・1　各種データベース利用を基礎から学び、各自が文献を精読し内容を発表・討議することで、「興味関心」を「具体的な研究目的」へと接続させるための基礎となる力を養う。
第3回	関心のあるテーマについての文献講読と討議・2
第4回	研究テーマの設定　2回の文献講読によって得られた知見を基に、研究テーマにたいする視点を焦点化し、研究のおおよその概念的な枠組みを得る。
第5回	研究の目的および仮説の設定　研究の具体的な目的を明文化し、検証すべき仮説を明らかにしながら、具体的な方法を検討する。
第6回	研究テーマに関する先行研究の収集と要約・1　先行研究を収集・要約・検討することで、自身の研究の必要性を再検討するとともに、より妥当性の高い目的・仮説の設定にむけた修整を行う。
第7回	研究テーマに関する先行研究の収集と要約・2
第8回	先行研究における研究方法の考察・1(社会調査法を中心に)　定量的・定性的調査それぞれにおいて、当該テーマに関わる先行研究の調査法のあり方を精査し、より妥当性・信頼性の高い方法論のあり方を探る。
第9回	先行研究における研究方法の考察・2(統計法を中心に)　科学的なエビデンスに基づいた研究を目指し、クロス集計等の基礎を確認するとともに、多変量解析等のより発展的な手法の実際を学ぶ。
第10回	研究方法の検討と作業仮説の設定・1　第9回までの内容を踏まえ、具体的な調査方法を検討するとともに、仮説検証にむけて積み上げるべき作業仮説と結果の予測を行う。
第11回	研究方法の検討と作業仮説の設定・2
第12回	研究計画書の作成・1　第11回までの内容を踏まえ、詳細な研究方法に加え、調査票等の素案と、結果予測・成果予測までを加えた研究計画を作成する。
第13回	研究計画書の作成・2
第14回	研究計画書のプレゼンテーションおよび討議　各自の研究計画をプレゼンテーションし、相互の問題点等を洗い出しながら、計画を洗練させることを目指す。
第15回	プレ調査と研究スケジュールの検討

履修上の注意

文献講読や討議等について、自分の研究テーマとの関連に関わらず積極的に参加すること。
EXCEL, SPSS等のソフトウェアを使用する。慣れていない場合、操作に習熟する様に努力をすること。
個別に指示した参考文献・書籍等については必ず目を通すこと。

評価方法

文献講読、討議内容、研究計画書等から総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。毎週文献・資料を配布する。

教育課題研究Ⅰ　　増南太志

授業概要

発達障害の理論、アセスメント、支援のあり方に関する国内外の文献を輪読し、問題意識を高めるとともに、研究テーマを絞り込む。そして、研究テーマに関する基礎文献を踏まえたうえで、研究計画の作成を図り、修士論文に求められる独創的な研究を遂行するための基礎的な力を身につける。

授業計画

到達目標

１．発達障害に関する問題意識を高め、研究テーマを明確にする。
２．基礎文献を踏まえた独創的な研究計画を作成する。
３．修士論文に必要な独創的研究を遂行するための基礎的な力を形成する。

第 1 回	オリエンテーション　発達障害研究について理解する
第 2 回	発達障害に関する問題意識とキーワードの明確化、参考文献の検索を行う
第 3 回	参考文献の検討および整理の仕方について学ぶ
第 4 回	文献から文献をたどって、発達障害に関する問題意識をより深化させる
第 5 回	発達障害に関する問題の整理と研究テーマの明確化を行う
第 6 回	研究テーマに関する文献の整理と研究方法の検討を行う
第 7 回	研究計画の作成および研究ノートの作成を行う
第 8 回	研究計画に関する文献の整理と仮説の検討を行う
第 9 回	研究計画に関する文献の整理とデータ内容の検討を行う
第 10 回	研究計画に関する文献の整理と対象者の検討を行う
第 11 回	研究計画に関する文献の整理とデータ収集方法の検討を行う
第 12 回	参考文献をもとに、研究計画に関して再検討し、必要に応じて修正する
第 13 回	発達障害研究における修士論文の位置づけを理解し、研究計画を作成する
第 14 回	研究テーマと研究計画を確定させる
第 15 回	まとめ　教育課題研究Ⅱに向けて整理する

履修上の注意

・適宜、研究経過を研究ノートにまとめること。
・日頃から、テーマとしている問題について、文献を収集し、後で振り返りやすいように整理すること。

評価方法

発達障害への問題意識が明確化されたか、独創性のある研究計画となっているかにより評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

教育課題研究Ⅱ　　梅澤　実

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」での「研究計画」「課題意識」に基づき「論文題目」を決定し、部分的論文草稿を作成し、中間発表の準備を行う。優れた修士論文の作成をめざし、授業実践に関する研究テーマを確定し、研究計画及び方法の立案し、問題の深化・明瞭化を指導する。

授業計画

到達目標

１．修士号請求論文の「論文題目」を決定する。
２．「研究計画」及びそれにともなう「課題意識」に基づく部分的論文草稿を作成する。
３．中間発表を行う。

第 1 回	授業の到達目標－修士号請求論文執筆に当たり、到達目標を確認する。
第 2 回	情報資料の検討－論文作成に関して、「研究計画」及び「課題意識」を踏まえて収集・解釈・整理した情報結果を発表しそれを授業参加者の考察対象とする。
第 3 回	データ収集方法の検討－第 2 回での情報資料検討議論をもとに、必要なデータ収集方法を検討する。
第 4 回	論文執筆の要領理解－「序文（序論／序章)」の構成等に関する検討を行う。
第 4 回	データ収集方法検討－第 3 回、第 4 回の授業をもとにデータ収集計画と方法を検討し、収集計画を立てる。(データ収集は計画に従い実施する)
第 5 回	執筆計画、データ収集計画の検討－論文執筆計画、データ収集計画等について発表し、授業参加者の考察対象とする。
第 6 回	データの分析－分析視点の検討－「研究計画」及び「課題意識」と「論文題目」原案を検討し、中間発表へ向けて準備する。
第 7 回	部分的論文草稿の検討（1）－部分的論文草稿を発表し、推敲する。
第 8 回	部分的論文草稿の検討（2）－部分的草稿の推敲に関して、継続収集した情報資料の解釈・整理に基づき、学校教育全体の視野からの検討を行う。
第 9 回	部分的論文草稿の検討（3）－部分的論文草稿の推敲に関して、教育研究様式の視点からの検討を行い、修正を行う。
第 10 回	部分的論文草稿の検討（4）－これまでの部分的論文草稿をもとに発表リハーサルを兼ねて報告し合い、草稿推敲の視点及び、データ継続収集の検討を行う。
第 11 回	部分的論文草稿の検討（5）－継続収集した情報資料の解釈・整理に基づき論文草稿の検討を行う。
第 12 回	論文構成の検討（1）－これまでに作成した部分的論文草稿をもとに論文全体を「論文題目」原案との関係から検討する。
第 13 回	論文構成の検討（2）－論文全体構成及び「序文（序論／序章)」草稿と「論文題目」原案の整合性を検討する。
第 14 回	中間発表準備－中間発表のリハーサルを行い、論文構成の修正を行う。
第 15 回	「論文題目」の決定と修士論文執筆計画立案

□授業は、教育課題研究Ⅰでの「研究計画」「課題意識」に基づき、事前に部分的論文草稿の提出が求められる。また、授業における研究討議への積極的な参加が求められる。
□データ収集の計画立案後は、研究倫理の下、計画に従い収集を行う。

毎回の授業で提出される論文草稿とそれに基づく授業中の議論への参加状況により、課題意識が深化・明瞭化されたかにより評価する。

適宜、授業で提示する。

教育課題研究Ⅱ　　渡邊光雄

授業概要

修士号請求論文の「研究計画／課題意識」に従い、教育方法学研究様式（規範的、記述的、処方的な各モデル）に即した関連情報資料の収集・解釈・整理に基づく論文草稿の作成と「論文題目」の決定を行う。

1 年次に行われた「研究計画」作成及び「課題意識」構成と「論文題目」原案作成に基づき、それまで収集してきた情報資料を教育方法学研究様式に即した再度の解釈・整理を行う。そして、それに連動してさらに収集された情報資料をやはり教育方法学研究様式に従った「KJ 法」等の情報資料整理法による解釈・整理（再再度の解釈・整理を含む）とそれに基づく部分的論文草稿作成を行いながら、執筆を可能とする「論文題目」を決定する。なお、部分的論文草稿段階における質の高いものについては、日本教育方法学会等での研究発表を勧める。

授業計画

到達目標

１．修士号請求論文の「論文題目」を決定する。
２．「研究計画」及びそれにともなう「課題意識」に基づく部分的論文草稿（論文の「章／節」に対応する部分の草稿）を作成する。
３．論文構成の中核部分の草稿を作成する。
４．学会発表原稿レベルの質の高い中核部分論文草稿作成を志向する。

第 1 回	本授業の到達目標（教育学研究倫理の下で「研究計画／課題意識」に基づく部分的論文草稿を作成し、「論文題目」を決めること、等）について検討する。
第 2 回	修士号請求論文執筆当事者が、自らの論文作成に関する教育学固有の研究倫理の下での部分的論文草稿作成の検討結果を発表し、授業参加者がそれを考察する。
第 3 回	論文執筆の要領として、「起・承・転・結」構成方式等による執筆や、執筆作業最終段階における「序文（序論／序章）」の記載、等に関する検討を行う。
第 4 回	論文執筆当事者が自らの論文作成における「起・承・転・結」構成方式等の執筆の段取りを自ら検討した結果について発表し、それを授業参加者が考察する。
第 5 回	論文執筆当事者が論文執筆作業最終段階における「序文（序論／序章）」の記載を自らに適用して検討した結果を発表し、授業参加者がそれを考察する。
第 6 回	「研究計画／課題意識」と「論文題目」原案の中核部分に相当する部分的論文草稿作成の必要性を踏まえ、その部分的論文草稿の学会発表可能性を検討する。
第 7 回	継続収集した情報資料の解釈・整理に基づき、中核部分に当たる部分的論文草稿の作成・発表・推敲を行う（同草稿を学会発表原稿草稿にする作業も進める）。
第 8 回	部分的論文（中核部分）草稿の推敲に関して、特別支援教育を含む学校教育全体の視野からの検討を行う（同草稿に基づく学会発表原稿推敲を併行させる）。
第 9 回	部分的論文（中核部分）草稿の推敲に関して、教育方法学研究様式の観点からの検討を行う（同草稿に基づく学会発表原稿推敲を続け、発表リハーサルを行う）。
第 10 回	部分的論文（中核部分）草稿の推敲に関して、学士・博士論文との質的相違の視点から検討する（同草稿に基づく学会発表原稿推敲と発表リハーサルを続ける）。
第 11 回	部分的論文（中核部分）草稿の推敲に関して、「専門職学位」と「研究学位」の違いからの検討を行う（同草稿に基づく学会発表原稿最終版を作成する）。
第 12 回	「研究計画／課題意識」と「論文題目」原案との関係から、中核となる部分的論文草稿を結論内容とする修士論文全体構成を検討し、「序文（序論／序章）」の執筆内容の検討に入る（同草稿に基づく学会発表については、学会投稿論文作成準備として修士論文全体構成と「序文（序論／序章）」草稿作成を行わせる）。
第 13 回	論文執筆当事者の論文全体構成及び「序文（序論／序章）」草稿と「論文題目」原案の整合性を検討する。
第 14 回	論文執筆当事者の論文全体構成及び「序文（序論／序章）」草稿と「論文題目」原案の整合性の検討を続ける。
第 15 回	修士論文執筆に当たって提出する「論文題目」を決定する。

履修上の注意

授業では、論文執筆当事者の確固たる「問題意識」に支えられた「研究計画」に基づいて独自性を発揮した部分的論文草稿の作成が求められ、とくに論文全体構成の中核部分の草稿作成においては、学会発表原稿に相当するものを作成することが求められる。

評価方法

毎回の授業において、論文執筆当事者による事前の部分的論文草稿提出及びそれに対する授業参加者全員による研究討議と「研究計画」及び「課題意識」の修正が求められるが、こうした状況への対応姿勢が評価される。とくに、自らの論文の「序文（序論／序章）」草稿作成についての評価が重視される。

テキスト

Wittrock, M.C. (Ed.). (1986).　Handbook of research on teaching. American Educational Research Association, 3rd ed.
日本教育方法学会紀要 教育方法学研究

教育課題研究Ⅱ　　金谷有子

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」において明確化された研究計画および研究テーマに基づき、先行研究論文の探究や教育実践に資する研究の実施およびデータ収集・データ分析と考察を進めていき、論文題目を決定する指導を行う。学期末に行われる修士論文中間報告会における報告の準備をしていく過程で、各自が妥当性・信頼性のあるより質の高い研究ができるように指導する。

授業計画

到達目標

１．修士論文の題目を決定する。
２．研究計画および問題意識に基づく部分的論文草稿を作成する。
３．中間報告会で発表する。

第 1 回	修士論文執筆に向けての準備（1)「教育課題研究Ⅰ」の成果を踏まえた上で研究計画推進していくための指導を行う。
第 2 回	修士論文執筆に向けての準備（2）優れた理論と実践研究を探る方法と論文執筆のための指導を行う。
第 3 回	先行研究論文の講読と討議（1）目的・問題意識および背景理論の検討
第 4 回	先行研究論文の講読と討議（2）データ収集方法の検討
第 5 回	先行研究論文の講読と討議（3）データ分析方法の検討
第 6 回	先行研究論文の講読と討議（4）結果の表示法と結果の考察検討
第 7 回	先行研究論文の講読と討議（5）今後の参考文献の検索と検討
第 8 回	論文構成と論文草稿（1）問題意識・目的の検討と文章化を行う。
第 9 回	論文構成と論文草稿（2）方法およびデータの検討と文章化を行う。
第 10 回	論文構成と論文草稿（3）分析方法と結果を検討し文章化を行う。
第 11 回	論文構成と論文草稿（4）結果の考察と文章化を行う。
第 12 回	論文構成と論文草稿（5）理論と文献の整理・検討と文章化を行う。
第 13 回	論文構成の再検討と討議（1）全体構成の整合性の検討と討議を行う。
第 14 回	論文構成の再検討と討議（2）全体構成の妥当性・信頼性の検討と討議を行う。
第 15 回	「論文題目」の決定と修士論文執筆計画の立案
第 16 回	修士論文の中間報告の発表　評価やコメントを「教育課題研究Ⅲ」で活かす。

履修上の注意

論文作成に向けて毎回積極的かつ意欲的に取り組むこと
自分のテーマに合った方法を用いてデータを収集すること
論文の下書きをしていくこと
求められた課題については期限厳守で提出すること

評価方法

テーマと研究計画作成に基づいて研究を進める意欲と実質的努力による成果および中間発表で総合的に評価する。

テキスト

適宜、参考文献を紹介する。同時に各自が必要な文献を探索してくる。また毎回プリント資料を配布する。

教育課題研究Ⅱ　　吉村日出東

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」の研究テーマをもとに、学際的立場からさらに先行研究を収集し、重要とされる論文を見極め、また、研究テーマに適切な研究調査指導を行い、修士論文作成に向けて構成の指導を行う。それらをもとに中間発表の準備を行う。

授業計画

到達目標

１．自己のテーマに関係する先行研究を見つけ出し、研究動向を整理できるようになる。
２．主要な論文を正確に読解し、課題などを見つけ出せるようになる。
３．修士論文に向けて、予備的調査を行えるようになる。
４．修士論文の中間報告のための報告(要旨・資料・発表原稿)が行えるようになる。

第 1 回	修士課程 2 年目の活動とは：今後の日程と前期に必ず行うべき注意事項の確認
第 2 回	修士論文構成の検討と資料の妥当性：これまでの成果について客観視する
第 3 回	主要論文の分析①：論文の歴史的意義について考察する
第 4 回	主要論文の分析②：論文で取り上げられた資料の価値について考察する
第 5 回	主要論文の分析③：研究動向を整理する
第 6 回	主要論文の分析④：これまでの研究から見えてきた課題を明確にする
第 7 回	資料収集と分析①：収集した資料から課題に対する新知見が得られるかを検討
第 8 回	資料収集と分析②：継続して資料の検討を行う
第 9 回	資料収集と分析③：これまで収集した資料以外から課題を克服できるか検討
第 10 回	論文を執筆する①：「序章－問題の所在」のための研究動向について草稿提出
第 11 回	論文を執筆する②：研究動向に関する草稿の検討
第 12 回	修士論文中間報告会にむけて①：報告会のための発表資料を検討する
第 13 回	修士論文中間報告会にむけて②：発表リハーサルと内容の修正
第 14 回	修士論文構成の再検討
第 15 回	教育課題研究Ⅲに向けて：調査、資料収集、論文執筆の計画を確認

履修上の注意

今学期の後半には、「序章-問題の所在」の部分となる先行研究とそれらの課題について分析した研究動向の草稿まで執筆できるよう、研究計画に従い勤勉に努めること

評価方法

先行研究を正確に読めているか、また、学術論文作成で行われている研究上の手続きについて理解できているかを中心に、研究内容の深まりを総合的に評価する。

テキスト

斉藤孝『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部
その他、必要に応じてプリントを配布する。

教育課題研究Ⅱ　　松永幸子

授業概要

教育課題研究Ⅰで行った文献講読や議論を基に、修士論文中間報告に向けて、修士論文計画を精錬させて行く。調査等により収集した資料を再検討、分析し、研究成果の論証性を高め、より強い独自性を明確化できるように指導していく。

授業計画

到達目標

1．先行研究を丹念に収集する姿勢を身につける。研究計画に基づき、先行研究を超えたオリジナリティを明確化できる。
2．仮説に基づき、収集した一次資料を検討することが出来る。
3．中間報告書を作成する。

第 1 回	研究計画書の検討
第 2 回	仮説と方法論の再検討
第 3 回	文献、一次資料の収集
第 4 回	文献、一次資料の講読
第 5 回	文献、一次資料の講読と検討
第 6 回	先行研究批判
第 7 回	独自性の明確化
第 8 回	中間報告書の作成
第 9 回	中間報告に向けたプレゼンテーション
第 10 回	文献、一次資料の再検討
第 11 回	文献、一次資料の再購読と検討
第 12 回	文献、一次資料の再収集と検討
第 13 回	中間報告書の再作成
第 14 回	中間報告会のリハーサルとディスカッション
第 15 回	中間報告会と討議

履修上の注意

先行研究を始め、文献、資料を丹念に検討する姿勢でのぞむこと。特に先行研究については、尊重しつつも、自らの研究の独自性を明確にすること。

評価方法

中間報告会の内容、研究の独自性の有無などの研究内容から判断する。

テキスト

適宜、資料を配布する。

教育課題研究Ⅱ　長友大幸

授業概要

教育課題研究Ⅰで作成した研究計画をもとに、研究テーマに関わる文献収集を継続するとともに、予備調査・本調査を実施し、データの収集・整理を行う。そして、収集された資料やデータの分析の視点、方法を提示・討論しながら研究テーマについて考察を深め、修士論文の中間報告会での発表を行うことができるように指導する。

授業計画

到達目標

1. 修士論文の予備調査・本調査を実施し、データの収集・整理を行うことができる。
2. データの分析の視点や方法を提示・討論しながら研究テーマについて考察を深められる。
3. 修士論文の中間報告会での発表を行うことができる。

第 1 回	修士論文作成に向け、論文作成の手法を理科教育関係学会誌（理科教育研究、環境教育、農業教育学会誌など）を参考に再確認する。
第 2 回	自身の研究テーマに係わる既往研究のレビューを通して、「研究の背景と目的」部分の執筆を行う。
第 3 回	各自が書いた「研究の背景と目的」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第 4 回	各自が再考した「研究の背景と目的」部分について、文献情報を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。「研究方法」部分の執筆を開始する。
第 5 回	各自が書いた「研究方法」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第 6 回	各自が再考した「研究方法」部分について、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。予備調査を開始する。
第 7 回	予備調査の結果により得られたデータの集計・解析方法を検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に集計・解析を行う。
第 8 回	予備調査のデータを集計・解析した結果について、文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再分析し、本調査でのデータ収集や解析の方法を検討する。本調査を開始する。
第 9 回	本調査の結果により得られたデータの集計・解析方法を検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に集計・解析を行う。
第 10 回	本調査のデーターを集計・解析した結果について、文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再分析し、「結果及び考察」部分の執筆を開始する。
第 11 回	各自が書いた「結果及び考察」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第 12 回	各自が再考した「結果及び考察」部分について、討論・批判的検討から得た情報をもとに修正して完成させる。
第 13 回	ここまでに得られた成果及び今後の研究の方向性・予定などを、プレゼンテーションソフトを用いて中間報告会で発表するための準備を行う。
第 14 回	中間報告会に向けたゼミ内の検討会を行い、討論・批判的検討から得た情報を基に内容及び発表方法の修正を行う。
第 15 回	発表内容とその方法が適切であるかどうか検討する。討論・批判的検討から得た情報を基に再修正を行い、中間報告会に向けた準備を完了する。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジュメを準備して臨むこと。

評価方法

出席と発表内容、討論への参加状況、研究への意欲及び中間報告会での発表などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

教育課題研究Ⅱ　　堀田正央

授業概要

教育課題研究Ⅰで立案した研究計画に基づき、プレ調査・本調査の実施およびデータ分析を行い、修士論文中間報告会における質の高い報告を目指す。問題解決のための具体的な提言に向けた科学的なエビデンスを得ることを目的に、妥当性・信頼性を担保しながら調査を進めることができるように指導する。

授業計画

到達目標

１．プレ調査を実施し、結果の検討から研究計画を修正する。
２．本調査を実施し、仮説検証に向けた科学的なエビデンスを得る
３．修士論文中間報告会にむけた報告書を作成する。

第 1 回	研究計画の再検討　目的と作業仮説との整合性等を含め、研究計画の最終的なチェックと修整を行いながら、より妥当性の高い計画の立案を目指す。
第 2 回	プレ調査の準備と成果予測　調査対象の確保や具体的な調査の手続きを確認するとともに、あり得る問題や成果を具体的に予測する。
第 3 回	プレ調査実施　本調査と同一の条件でプレ調査を行いながら、調査内容や手続きの不備や改善点を洗い出す。
第 4 回	プレ調査データ集計・分析　プレ調査の結果を集計し、調査票の信頼性や作業仮説の妥当性等を検討する。また本調査で予定している検定方法を試行し、問題があれば方法の再検討を行う。
第 5 回	プレ調査の結果に基づく調査方法・内容の修正　第 4 回において明らかになった問題点を修正し、目的にむけたより妥当性の高い調査方法・内容にむけた調整を行う。
第 6 回	本調査準備
第 7 回	本調査実施
第 8 回	本調査データ集計・分析・1　全ての変数の度数分布や、全てのインタビュー項目の逐語録等を作成しながら、データ分析における基礎資料の重要性を確認し、予定している分析方法の適合度を検討する。
第 9 回	本調査データ集計・分析・2　作業仮説に基づいた分析を進めるとともに、仮説が棄却された場合の変数の再計算や欠損値処理のあり方等を検討する。
第 10 回	本調査データ集計・分析・3　グラフ・表等を含めた分析結果の表現方法を検討するとともに、仮説に反したデータの考察を行う。
第 11 回	分析結果の考察と討議　各自の分析結果を考察・討議しながら、調査者のバイアスを除去するとともに、グループダイナミズム基に新たな視点を加えながら考察を深める。
第 12 回	修士論文構成の検討　論文で用いるデータの取捨選択や、考察の質および量の検討を行い、独自の主張を軸にした論文全体のストーリーをまとめる。
第 13 回	修士論文中間報告会にむけたプレゼン資料作成
第 14 回	修士論文中間報告会リハーサルと内容討議
第 15 回	修士論文中間報告会資料の修整

＊調査等の実施については各自の進捗状況に応じて前後する。

履修上の注意

文献講読や討議等について、自分の研究テーマとの関連に関わらず積極的に参加すること。
統計分析等の技術が十分では無い場合、授業時間外での指導を受けること。
個別に指示した参考文献・書籍等については必ず目を通すこと。

評価方法

修士論文中間報告会資料を中心に、調査の過程や取組方から総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。適宜資料を配布する。

教育課題研究Ⅱ　　増南太志

授業概要

1 年次に作成した研究計画に基づき、収集してきた資料を整理し、発達障害に関する研究テーマと研究計画、方法等を確定する。特に、仮説と仮説を検証するためのデータの関係など研究の骨子となる部分を明確にし、必要に応じて見直しを図る。再度、資料の収集・整理およびデータの収集・分析を行い、部分的な論文草稿を作成し、論文題目を決定し、中間発表を行う。

授業計画

到達目標

1．修士号請求論文の論文題目を決定する。
2．研究の骨子を明確にし、データの収集・分析を行い、部分的な論文草稿を作成する。
3．中間発表を行う。

第 1 回	授業の到達目標と進め方について理解する
第 2 回	研究計画と文献をもとに仮説の明確化を図る
第 3 回	仮説と仮説を検証するためのデータの関係について検討する
第 4 回	研究の骨子の確認とデータ収集方法の検討を行う
第 5 回	収集した予備データの検討、方法の見直し、本データの収集について検討する
第 6 回	本データを収集し、進捗状況を報告する
第 7 回	収集した本データの分析の視点を検討する
第 8 回	分析結果の解釈の仕方について検討する
第 9 回	分析結果を解釈するための文献整理および分析の視点の見直しを行う
第 10 回	必要に応じて論文題目の修正を行いつつ、部分的論文草稿を作成する
第 11 回	データ分析の結果に応じて、部分的論文草稿の内容を見直す
第 12 回	データ分析の結果を補完する文献を整理し、部分的論文草稿を検討する
第 13 回	部分的論文草稿をもとに論文全体の構成を検討する
第 14 回	中間発表の準備およびリハーサルを行う
第 15 回	論文題目の決定と修士論文執筆計画立案を行う

履修上の注意

・他者の研究にも関心を持ち、研究討議に積極的に参加すること。
・部分的論文草稿は何度も見直しを行う必要がある。積極的に提出し、指導教員のチェックを受けること。

評価方法

部分的論文草稿と、研究内容の深まりを総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

教育課題研究Ⅲ　　梅澤　実

授業概要

本授業は、「教育課題研究Ⅱ」をもとに、授業実践に関する研究の部分的論文草稿から論文構成を検討し、修士論文完成を目的とする。具体的には、毎回の授業前半に、論文草稿に関わる研究指導教員の点検事項を授業参加者全員での考察対象とし、授業後半は、研究指導教員による点検とその指導の下での草稿修正を行い、修士号請求論文の完成を図る。

授業計画

到達目標

１．修士号請求論文を完成する。
２．修士号請求論文内容の「学位プログラム」（学士・修士・博士の学位）上の性質を認識する。
３．修士号請求論文内容の「研究様式」上の性質及び「社会的位置付け」を認識する。

第 1 回	授業計画－修士論文作成計画の確認－中間発表の意見をもとに論文全体の構成、研究計画を確認する。
第 2 回	修士号請求論文執筆指導－修士論文作成に関わって事前に提出された部分的論文草稿を執筆者の考え方を軸に授業参加者全員で研究討議を行う。
第 3 回	修士号請求論文執筆指導－論文草稿内容を「学位プログラム」「教育研究」の観点から授業参加者全員で研究討議を行う。
第 4 回	補充文献・データ資料の確認－第 3 回までの授業をもとに、修士論文作成に必要な補充文献・データ資料について点検し、収集計画を立てる。
第 5 回	補充文献・データ資料の結果分析－収集した補充文献・データ資料の分析について授業参加者全員の研究討議を経て、修士論文全体構成を修正・検討する。
第 6 回	修士号請求論文執筆指導－修士号請求論文作成に関する事前提出の論文草稿内容と資料・データの観点から授業参加者全員で研究討議い、修正する。
第 7 回	修士号請求論文執筆指導－修士号請求論文作成に関し、「専門職学位」の観点から授業参加者全員で研究討議を行い、修正する。
第 8 回	修士号請求論文執筆指導－これまでの修正を踏まえた論文草稿に対する指導教員の点検事項について、論文執筆当事者の考え方を軸に授業参加者全員による研究討議を行い論文草稿の修正を行う。
第 9 回	修士号請求論文執筆指導－論文草稿の修正を踏まえ「研究様式」の観点からの研究討議を授業参加者全員で行い、全体的論文草稿の検討を行う。
第 10 回	修士号請求論文執筆指導－全体的論文草稿について、「先行研究の成果」の観点から検討し、全体的論文草稿の修正を行う。
第 11 回	修士号請求論文執筆指導－これまでの修正を踏まえた全体的論文草稿を「教育実践への寄与」の観点から検討を加え、全体的論文草稿を修正する。
第 12 回	修士号請求論文執筆指導－全体的論文草稿を「学界の水準」の観点から授業参加者全員で研究討議を行い、全体的論文草稿の修正を行う。
第 13 回	修士号請求論文執筆指導－修士号請求論文の完成を促す。
第 14 回	修士号請求論文発表準備－修士号請求論文発表に向けて発表原稿を作成する。
第 15 回	まとめ－修士号請求論文提出に向けて

履修上の注意

□各自の執筆の状況の進捗状況を明確にしながら受講し、個別指導や質疑とディスカッション、報告会などを積極的に行う。
□修士号請求論文執筆は、事前に部分論文草稿及び全体的論文草稿を提出し、指導教員による点検を受ける。

評価方法

研究討議への積極的な参加、また、各回に提出する論文草稿により、研究経過の深化及び修士号請求論文発表原稿を総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

教育課題研究Ⅲ　　渡邊光雄

授業概要

本授業は、次のことを前提としている。すなわち、修士号請求論文執筆当事者が、論文執筆に関して2年次前期で積み重ねた部分的論文草稿作成と全体構成に基づき、論文構成の「章／節」に対応する草稿の清書を事前に行って研究指導教員に提出することを前提としている。研究指導教員は、当該授業の前にその清書内容の点検とその結果の執筆当事者への提示を行う。15 回にわたる授業の前半においては、部分的論文草稿清書内容に関わる研究指導教員の点検事項を授業参加者全員で考察する。15 回の授業の後半においては、論文全体の草稿の事前提出及び研究指導教員によるその点検とその下での全体的論文草稿清書の修正を行い、修士号請求論文の完成を図る。

授業計画

到達目標

1．修士号請求論文（「専門職学位」相当の資格付与論文）を完成する。
2．修士号請求論文内容の「学位プログラム」（学士・修士・博士の学位修得プログラム）上の性質を理解する。
3．修士号請求論文内容の「研究様式」（教育方法学研究様式）上の性質を理解する。
4．修士号請求論文内容の「社会的位置づけ」（旧「教育学修士」と現行「修士（教育学）」の相違）を理解する。

第1回	修士号請求論文作成において陥りやすいスランプ状態（論文各章を個別に執筆し終えた時点で論文全体の完成を錯覚することから生じる虚脱感）を確認する。
第2回	修士号請求論文執筆当事者の部分的論文草稿清書内容について、自由研究討議を授業参加者全員で行い、「第2回修士論文中間報告会」への準備を行う。
第3回	前回授業の結果を踏まえ、「学位プログラム」の観点からの研究討議を授業参加者全員で行い、「第2回修士論文中間報告会」への準備を行う。
第4回	第 2，3 回授業の結果を踏まえ、教育方法学研究様式の観点からの研究討議を授業参加者全員で行い、「第2回修士論文中間報告会」への準備を行う。
第5回	第 2，3，4 回授業の結果を踏まえ、旧「教育学修士」と現行「修士（教育学）」の観点から研究討議を行い、「第2回修士論文中間報告会」への準備を行う。
第6回	第2，3，4，5回授業の結果を踏まえ、「専門職学位」の観点からの研究討議を授業参加者全員で行う。
第7回	これまでの部分的論文草稿の清書及びその検討を踏まえ、全体的論文草稿の清書に関する検討を、論文執筆当事者の考え方を軸にした自由研究討議で行う。
第8回	これまでの部分的論文草稿の清書及びその検討を踏まえ、全体的論文草稿の清書について、「学位プログラム」の観点から研究討議する。
第9回	これまでの部分的論文草稿の清書及びその検討を踏まえ、全体的論文草稿の清書について、教育方法学研究様式の観点から研究討議する。
第10回	これまでの部分的論文草稿の清書及びその検討を踏まえ、全体的論文草稿の清書について、旧「教育学修士」と現行「修士（教育学）」の相違の観点から研究討議する。
第11回	これまでの部分的論文草稿の清書及びその検討を踏まえ、全体的論文草稿の清書について、「専門職学位」の観点から研究討議する。
第12回	修士号請求論文内容を「教育実践への寄与」の観点から検討し、論文完成を促す。
第13回	修士号請求論文内容を「学界の水準」の観点から検討し、論文完成を促す。
第14回	修士号請求論文内容を「先行研究の成果」の観点から検討し、論文完成を促す。
第15回	修士号請求論文内容を「独自の論理・知見・発想」の観点から検討し、論文完成を促す。

履修上の注意

修士号請求論文内容の独自性は、論文執筆当事者の日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高めたところで成り立っている。論文執筆当事者は、1年次後期の「教育課題研究Ⅰ」において検討した自らの「問題意識」を忘れない限り、論文の独自性が崩れないことを自覚しながら、本授業を履修する必要がある。また、教育学（教育方法学）分野における修士号請求論文の内容については、それが当該授業の研究討議で検討される中で質的に向上（「止揚」）することが企図されているところから、授業における研究討議に積極的に参加することが求められる。

評価方法

授業では、論文執筆当事者が事前提出した部分的論文草稿及び全体的論文草稿の研究指導教員による点検とそれに基づく論文執筆当事者による修正が求められる。また、授業における研究討議への積極的な参加が求められる。これらの求めに対する論文執筆当事者の対応姿勢が評価される。

テキスト

Wittrock, M.C. (Ed.). (1986).　Handbook of research on teaching. American Educational Research Association, 3rd ed.
日本教育方法学会紀要　教育方法学研究
渡邊光雄（1994）．クラフキの「二面的開示」に関する研究 東京：勁草書房

教育課題研究Ⅲ　　金谷有子

授業概要

「教育課題研究Ⅱ」における研究の中間報告の成果・反省・検討課題を踏まえて、研究内容の考察と分析を行い、修士論文を完成する。先行研究の知見を踏まえながら独自の視点から問題提起と探究を行い、教育実践に寄与できる水準の修士論文になるように指導する。学年末の修士論文発表会で研究成果を公表し、高い評価を得られる論文を目指す。

授業計画

到達目標

１.「教育課題研究Ⅱ」の成果を踏まえて各自が研究を続行する。
２. 教育実践に寄与できる内容の考察を行う。
３. 修士論文を書き上げる。
４. 修士論文を発表し評価を受ける。

第 1 回	「教育課題研究Ⅱ」の成果と反省を踏まえて：今後の論文作成の計画作成する。
第 2 回	独創性ある論文作成に向けて（1）：各自の中間発表の成果と検討課題の確認
第 3 回	独創性ある論文作成に向けて（2）：現実的問題への文献的裏付けのための指導
第 4 回	独創性ある論文作成に向けて（3）：理論と実践の融合のための文献的裏付け
第 5 回	整合性・妥当性がある論文作成に向けて（1）現実問題への寄与
第 6 回	整合性・妥当性がある論文作成に向けて（2）実践的意義の検討
第 7 回	整合性・妥当性がある論文作成に向けて（3）修士論文の全体構成の作成指導
第 8 回	信頼性がある論文作成に向けて（1）「問題意識・目的」の発表と検討・指導
第 9 回	信頼性がある論文作成に向けて（2）修士論文の「方法」の発表と検討・指導
第 10 回	信頼性がある論文作成に向けて（3）修士論文の「結果」の発表と検討・指導
第 11 回	信頼性がある論文作成に向けて（4）修士論文の「考察」の発表と検討・指導
第 12 回	論文全体の検討（1）各自の修士論文の全体構成の再検討とその指導
第 13 回	論文全体の検討（2）修士論文の推敲と指導
第 14 回	論文全体の検討（3）修士論文の完成に向けての最終指導
第 15 回	修士論文の完成
第 16 回	修士論文の口頭発表

履修上の注意

修士論文作成に積極的かつ意欲的に取り組むこと
正しい論文作成作法に則りと質の高い論文作成に努力をすること

評価方法

研究討議への積極的な参加、また、各回に提出する論文草稿により、研究経過の深化及び修士号請求論文発表原稿を総合的に評価する。

テキスト

適宜参考文献を紹介する。

教育課題研究Ⅲ　　吉村日出東

授業概要

2年次前期までに積み重ねた研究をもとに、大学院での学修成果として修士論文の完成を目指す。研究方法や論文執筆に当たり、データの誤りや他の論文からの剽窃などないように厳しく指導するとともに、論文作成に当たっては、常に教育の実践現場と繋がるよう意識付けを行う。

授業計画

到達目標

１．修士論文作成のための資料収集及び社会調査について、適切に行えるようになる。
２．修士論文作成で見えてきた課題を見極め、実際の教育との間に乖離がないか、検討する。
３．修論作成を通して、研究者倫理を身につけ、教育者としての職業倫理につなげられるようする。
４．大学院において学修した成果として修論を完成し、教育実践を行うための基礎となるようする。

第1回	修士論文完成に向けて：今後の日程の確認
第2回	調査資料の検討①：収集資料の検討と再度収集すべきか検討
第3回	調査資料の検討②：継続収集資料の検討
第4回	論文構成の再検討：各章の内容を検討する
第5回	修士論文の執筆指導①：各章の進捗状況と次回までの執筆の確認
第6回	修士論文の執筆指導②：進捗状況の確認と報告会資料作成の指導
第7回	修士論文の執筆指導③：院生間で論文草稿を発表し、各自の検討材料とする
第8回	論文構成の再検討：院生同士の批判をもとに構成の修正
第9回	研究者倫理について：これまでの研究を整理し、研究者の守るべきことを確認
第10回	調査資料の検討③：執筆中に収集した資料の検討
第11回	修士論文の執筆指導③：進捗状況の確認と新資料による章構成の修正
第12回	修士論文の執筆指導④：注書きと引用の適正さを確認
第13回	修士論文の執筆指導⑤：最終原稿及び研究題目名の確認と製本作業などの注意
第14回	修論完成に当たって：大学院の学修と研究成果を発表、今後の課題を明確化
第15回	修論審査に向けて：完成した論文の現代的意義の確認と審査のリハーサル

履修上の注意

論文を期限内に完成させるためには、余裕をもった作業が必要となる。研究の行き詰まりや焦りから、データの改ざんや他の論文からの無断引用、剽窃などしないよう慎むこと。発覚した場合は、本単位が認められないだけではなく、学則に従って厳正な処分が行われることになる。

評価方法

完成した論文に対する評価を主に、研究に望む姿勢、学修態度など総合的に評価する。

テキスト

斉藤孝『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部
上記以外は、適宜必要に応じてプリント配布する。

教育課題研究Ⅲ　　松永幸子

授業概要

教育課題研究Ⅱで行った中間報告の結果を受け、更に修士論文を精錬させ、その完成を目指す。結果として、独自性、論証性の高い論文となるよう指導する。

授業計画

到達目標

１．独自性の高い修士論文を完成させることが出来る。

２．社会の発展に寄与し得る研究成果の提示を行う。

第 1 回	中間報告会での検討結果について
第 2 回	中間報告会を踏まえての再考・検討
第 3 回	文献、一次資料の講読と検討
第 4 回	独自性の確認
第 5 回	文献、一次資料の再検討
第 6 回	修士論文作成
第 7 回	修士論文作成と検討
第 8 回	修士論文作成と討論
第 9 回	修士論文作成過程報告
第 10 回	修士論文作成と課題の確認
第 11 回	修士論文作成と課題の考察
第 12 回	修士論文発表準備
第 13 回	修士論文発表会プレゼンテーションリハーサル
第 14 回	修士論文発表会と検討
第 15 回	修士論文完成と校正

履修上の注意

修士論文執筆にあたっては、作成のルールを守り、独自性の高いものに仕上げること。
余裕を持って取り組むこと。

評価方法

修士論文の内容により判断する。

テキスト

特に定めず、適宜、資料を配布する。

教育課題研究Ⅲ　　長友大幸

授業概要

教育課題研究Ⅱ及び中間報告会を通じて明らかになった課題を修正するとともに、研究テーマに関わる文献収集を継続し、収集された資料やデーターの分析、理論的・批判的討論等を通して考察を深め、修士論文を完成させ、発表会での発表を行うことができるように指導する。

授業計画

到達目標

１．中間報告会までに明らかになった課題を修正し、研究の方向性を正しく定めることができる。
２．データーを分析し、討論等を通して研究テーマについて考察を深めることができる。
３．修士論文を完成させ、修士論文発表会での発表を行うことができる。

第 1 回	中間報告会で明らかになった課題や理科教育関係学会誌（理科教育研究、環境教育、農業教育学会誌など）を参考に論文の構成を確認する。
第 2 回	中間報告会で明らかになった課題や自身の研究テーマに係わる既往研究の再レビューを通して、「研究の背景と目的」部分の加筆・修正を行う。
第 3 回	各自が加筆・修正した「研究の背景と目的」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第 4 回	再考された「研究の背景と目的」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。
第 5 回	中間報告会で明らかになった課題や既往研究の再レビューを通して、「研究方法」部分の加筆・修正を行う。
第 6 回	各自が加筆・修正した「研究方法」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第 7 回	再考された「研究方法」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。
第 8 回	中間報告会で明らかになった課題を基にデーターの集計・解析方法を再検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に改めて集計・解析を行う。
第 9 回	再集計・再解析した結果について、中間報告会で明らかになった課題や文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再確認し、「結果及び考察」部分の加筆・修正を行う。
第 10 回	各自が加筆・修正した「結果及び考察」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第 11 回	加筆・修正して再考された「結果及び考察」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに修正して完成させる。
第 12 回	ここまでに得られた成果を基に「総合考察」部分の執筆を行う。そして、討論・批判的検討から得た情報を基に修正の検討を行う。
第 13 回	各自が修正した「総合考察」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に修正し、修士論文を完成させる。
第 14 回	「研究の背景と目的」から「総合考察」までの修士論文の内容を要約し、プレゼンテーションソフトを用いて修士論文発表会で発表するための準備を行う。
第 15 回	修士論文発表会に向けたゼミ内の検討会を行い、討論・批判的検討から得た情報を基に内容及び発表方法の修正を行い、修士論文発表会に向けた準備を完了する。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

発表内容、討論への参加状況、研究への意欲及び修士論文の内容・発表などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

教育課題研究Ⅲ　　堀田正央

授業概要

教育課題研究Ⅱにおける調査・分析の結果に基づき、修士論文の最終的な完成を目指す。科学的根拠に基づくことはもちろん、問題解決のための具体的な提言に繋がること、幼稚園・小学校等における教育実践に寄与することを条件に、十分な水準を担保した修士論文となるように指導する。

授業計画

到達目標

１．科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。
２．先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。
３．具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。

第 1 回	修士論文中間報告会における指摘事項の確認
第 2 回	修士論文中間報告会における指摘事項への対応
第 3 回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・1　中間報告会等での成果を踏まえ、仮説の検証により効果的な分析方法を再検討するとともに、分析方法に大きな変更が無かった場合も始めから再分析を行い、第 3 者による計算のチェックを受けることで、データの信頼性を確保する。
第 4 回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・2
第 5 回	図表の表現等の再検討　グラフや表等について、データの表現として適切であるか、複数の表現方法を比較することで検討し、「何を表すか」と同様に「どうやって表すか」ということの重要性を知る。
第 6 回	先行研究の再確認と参考資料の追加を通じた研究の独自性の確認　一連の調査分析・考察の概略をまとめた後、改めて先行研究を見直すことで、自身の主張の独自性や、その根拠となるエビデンスの妥当性を再確認する。
第 7 回	修士論文作成と進捗状況の発表・1　第 6 回までの内容を踏まえ、各論的な修正を踏まえながら、修士論文本体の作成を行う。参加者は毎週進捗状況の報告を義務づけ、無理なく論文作成が可能なスケジュール管理を徹底する。
第 8 回	修士論文作成と進捗状況の発表・2
第 9 回	修士論文作成と進捗状況の発表・3
第 10 回	修士論文作成と進捗状況の発表・4
第 11 回	修士論文作成と進捗状況の発表・5
第 12 回	修士論文第一稿発表　第一稿を比較的早く提出することで、全体の構成の調整や部分的な再分析を可能にし、論文としての完成度を高めることを目指す。
第 13 回	修士論文発表会プレゼン資料の作成と修士論文の修整
第 14 回	修修士論文発表会リハーサルと修士論文の修整
第 15 回	修士論文最終稿発表および校正

＊各回の内容は各自の進捗状況に応じて前後する場合がある。

履修上の注意

修士論文作成にあたっては余裕を持って取組み、スケジュールを厳守すること。
論文が水準に満たない場合は、修士論文発表会への参加を認めない場合がある。

評価方法

修士論文の内容を中心に総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。適宜資料を配布する。

教育課題研究Ⅲ　　増南太志

授業概要

2 年次前期までに積み重ねた発達障害に関する研究について、データ収集と分析を行い、仮説を検証する。それまでに作成した部分的論文草稿と照らし合わせ、論文構成を見直しつつ、研究の限界と課題を明確にし、修士号請求論文を完成させる。また、修士論文の発表を行う。

授業計画

到達目標

1．修士号請求論文を完成させる。
2．発達障害研究における修士号請求論文の内容の位置づけを認識する。
3．これまでの一連の研究活動を通じて、発達障害のある児童への教育的支援を実践する高度専門職としての専門性を身につける。

第 1 回	中間発表の意見をもとに論文全体の構成、研究計画を確認する
第 2 回	中間発表の意見をもとに論文の見直しを図る
第 3 回	収集・分析したデータによる仮説の検証方法を検討する
第 4 回	分析結果と仮説の一致・不一致箇所を確認する
第 5 回	分析結果と仮説の一致箇所に関して解釈し、文献整理を行う
第 6 回	分析結果と仮説の不一致箇所に関する文献整理の仕方について検討する
第 7 回	仮説と結果の対応関係について検討し、論文構成を図式化する
第 8 回	結果に用いる図表と分析結果を定める
第 9 回	研究対象や方法を整理し、必要に応じて文献による補完を行う
第 10 回	序論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第 11 回	結論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第 12 回	研究の限界と将来の課題について検討しつつ、文献による補完を行う
第 13 回	修士号請求論文内容を全体構成の観点から検討し、論文完成を促す
第 14 回	修士号請求論文発表に向けて原稿を作成する
第 15 回	まとめ　修士号請求論文提出に向けて

履修上の注意

・研究と執筆を計画的に行い、その進捗状況を適宜報告すること。
・修士号請求論文は繰り返し見直しをする必要があるため、積極的に提出し、指導教員のチェックを受けること。

評価方法

論文草稿、研究の進捗状況及び修士号請求論文発表原稿により評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。